

[平成 17 年 発表分]

義母・上田フサ子のご信心

第七連合第二事行組 上田延子

ありがとうございます。

今日は平成十一年に八十歳で亡くなりました主人の母、上田フサ子のお話をさせていただきます。

義母は早くに連れ合いを亡くし、八幡浜で長男の家族と暮らしていました。生前は熱心な佛立信者で、八幡浜本唱寺の事務局長も務め、朝夕欠かさずお看経をあげていたのを思い出します。

義母は常日頃、よくこう言っていました。「八幡浜はご信者さんが少なく、お年寄りが多いので、自分がやらなければならない。でも、私も八十が近くなった。いつまでやれるかなあ」と。しかし不安を口にしながらも、率先してお寺のご奉公をする義母の姿には、そんな自分を自負して頑張る様子が感じられました。

義母は若い頃から大家族を支え、いろいろと苦労が多かったようですが、実年より若く見え、気丈で思いやりのある人柄でした。本寺である松山の御会式には必ず参詣し、私たち家族と会うのを楽しみにしておりました。

義母は寝る前に、コップ半分のお酒を晩酌するのが楽しみの日課で、亡くなるまで特に大病をすることもなく、元気に過ごしました。以前、子供たちに「もし病気になっても、手術はするな」と何度も言っておりました。おそらく、無駄な延命はするなということだったと思いますが、かと言って健康を疎かにすることはなく、人一倍身体に気を付ける人でした。

そんな義母が、何の前触れもなく急に子宮から出血し、近所の医師の診察を受けて、すぐに国立がんセンターに入院することになったのは平成十一年の五月半ばでした。医師の説明では、かなり進行したがんで、手遅れの状態でした。義母は不安でいっぱいの様子で、私たちも「今まで元気だったのにどうして……」と、うろたえました。

とりあえず、出血を止めるための放射線治療が始まりました。ところが治療を始めて数日で、義母のお腹には腹水が溜まりはじめ、食事も喉を通らなくなり、間もなく放射線治療は中止されました。前後して御導師、奥さま、お教務方のお見舞いをいただき、枕元にはお助行を録音したカセットテープと、お供水が置かれました。義母は横になったまま、いただいたテープの御題目をずっと聴いておりました。そしてお陰をいただいて、容態は一時的に落ち着いたようでした。

しかし小康状態は長く続きませんでした。義母の病状は思いのほか悪化して、やがて自分では身体を起こすこともできなくなり、トイレも介助が必要になりました。私が届ける果物や食事も、最初は「美味しい」と言って喜んで食べていましたが、だんだん口にしなくなりました。不思議と痛みを訴えることはありませんでしたが、身の置きどころのない苦しさが窺えました。

そんな病状の悪化を見て、私たちは「このままではいけない。今、動かせるうちに親戚の多い八幡浜

に帰る方がよいのでは」と思い、義兄に相談して八幡浜の病院に転院する手続きをしました。転院して一週間後に見舞ったときには、義母は家族に付き添われ、酸素マスクをして寝ておりました。義母は苦しそうではありましたが、気丈にも「家が狭いので、お通夜は向かいの空き家を借りるように」「遺影は、私が選んだ中から決めるように」と自分の葬儀の指図をし、また私たち家族にも「今日は帰らずに八幡浜に泊まっていきなさい」と言いました。そして翌日、義母は帰らぬ人となりました。臨終は穏やかで、安らかな寝顔でしたが、家族思いでやさしい義母が、こんなにも急に逝ってしまったことに、深い悲しみがこみ上げました。

葬儀も終え、日が経つにつれて、「義母は自分の思う通りに一生を終えたのではないか」と思うようになりました。入院するまで普通に生活し、大嫌いな手術もしないで済みました。死の恐怖を背負った長い長い闘病生活も送らず、誰にも迷惑をかけず、そして最後は、家族みんなに見送られて寂光に帰ったのですから。「ご奉公の徳をいただくというのは、こういうことなのだなあ」と改めて思いました。

これを書いているうちに、義母の電話の音が頭の中に浮かんできました。

「ノブちゃん、みんな元気か？ ヒサンは仕事、頑張りよるか？ 風邪ひいたらいけんで。今度お寺へ行くけんな」

もう御会式で義母に会うことはできませんが、それでも御会式に参詣すると、どこかに義母がいるような気がします。

早いもので、今年はその義母の七回忌を迎えます。少しでも義母のご信心に近づけるよう、私も努力しなければと感じ、追悼の意を込めて義母のお話しをさせていただきました。

ありがとうございました。

(平成十七年一月九日発表)

増益寿命の御利益

第八連合第一信要組 久米利子

ありがとうございます。

健康には自信のあった私が、昨年は闘病生活を体験しました。今日はそのときのお話しをさせていただきます。

昨年、五月二十日のことです。夜中に急に吐き気がし、胃が痛みはじめました。翌二十一日には、それでも朝参詣をさせていただきましたが、吐き気と胃の痛みで本堂に上がることができませんでした。

家に帰って、すぐに掛かり付けの病院に行きました。そのときはまだ、これは毎年一度は起こる持病の胃痙攣と聞いていたので、痛み止めと点滴をすれば、すぐに治ると考えていたのです。

ところがそこは休診で、紹介状をもらって近くの胃腸専門の病院へ行くことになりました。胃カメラの検査をしましたが、順番を待つ間も今までと違い、熱が四十度近く出て、悪寒でガタガタ震えていました。胃カメラを飲むときも、熱と吐き気で苦しい思いをしました。吐き気と痛みは治まりませんでし

たが、検査の結果は異常がなく、一旦家に帰ることになりました。

家に戻ると、婦人会長の森さんが心配して待っていてくれました。食事を作っていただきましたが、一口も喉に通らず、そのままベッドに倒れこんでしまいました。

それから何時間経ったでしょう。夕方だったと思いますが、意識が朦朧とする中で、周りが騒がしいのに気が付きました。見ると、局長夫妻、息子夫婦、甥夫婦が来ており、間もなく私は救急車で南松山病院に運ばれました。

病院では、検査、検査の末に、ようやく胆嚢の石が化膿しているのが原因と分かりました。化膿がひどいので、すぐに胆嚢を全摘出することになりました。手術は二時間程度の予定でしたが、石が大きく、化膿もひどいので、三時間半もかかりました。手術の間はずっと、婦人会の皆さんをはじめ、大勢のお助行をいただきました。あとで主治医の先生から、「もう二～三日発見が遅れていたら、たいへんなことになるころだった」と聞き、改めてたくさんの方に心配いただいたお陰、お助行くださった皆さんのお陰、そして御法さまのお陰に感謝をいたしました。

手術後も、連合内のご信者さんには毎晩一週間のお助行をいただき、お陰で患部も順調に快復してきました。ところが安心したのも束の間、間もなく二回も意識不明で倒れ、検査の結果、今度は心臓に小さな穴があることが分かりました。そのため、脈拍が通常の半分以下になることがあり、倒れると脳に血液が行かなくなって、脳梗塞等で植物人間になる可能性もあるとの説明で、今度は心臓にペースメーカーを入れることになったのです。

それから四十日間、酸素マスクや心電図等の器具を付けて、ナースセンターで二十四時間監視されながら、ベッドの上で起き上がるだけの生活が続きました。今までの元気でしたので、相継ぐ病気の発見と、この長い闘病生活が耐え切れず、「これで身体の果報も尽きてしまったのだろうか」と暗い気持ちになりました。しかし、「もう一度ご奉公のできる身体に戻してください」とベッドの上で御法さまにお縋りし、ひたすら御題目をお唱えして頑張りました。

やがてお陰をいただき、手術ができるまでに体調も快復して、大部屋に移ることができました。私は御法さまへのご恩返しをさせていただこうと、同室の患者さんにご信心の話をさせていただきながら、手術の日を待つ生活になりました。

心臓の手術は、愛大病院の循環器専門の今川先生に執刀していただきました。手術後十日目の七月四日には退院でき、十七日の開導会には御礼参詣をさせていただくことができました。二ヶ月の入院中、御導師さまはじめ、多くの方のお見舞いをいただき、励ましていただきましたこと、心より感謝しております。

退院から五ヶ月あまり、朝参詣も休むことなく続けられ、身体にも徐々に自信がついてきました。今では健康な頃の八割程度は、ご奉公もできるようになりました。

今回、御法さまからいただいた増益寿命のご利益に感謝し、開講百五十年に向けてお教化に、ご奉公にと励んでいきたいと思っております。

ありがとうございました。

(平成十七年一月十六日発表)

主人の遺してくれた佛立信心

第九連合第二妙唱組 一色美代枝

ありがとうございます。

私は昭和二十三年に、のちに御導師のお弟子としてご奉公させていただいた淳敬師と縁あって結婚し、それが本門佛立宗の信仰との出会いとなりました。嫁ぎ先の宗旨ということで、お姑さんに仕えるつもりで、真似事ながらご信心を始めることになったのです。

当時の主人は、炭鉱の製材所に勤務しておりましたが、ご信心はそんなに熱心ではなく、「おまえも信心をしようと思うならすればよし、いやならしなくてもよい」と言われたのを思い出します。それでも根が真面目な主人は、御法のお陰をいただいて、いろいろと御利益を頂戴しておりました。私はそんな主人の御利益を見ながら、この御題目の有難さを覚えていったと思います。

不衛生な時代でしたので、ときどき回虫の検査がありました。あるとき、検査で何も発見されずに安心していたところ、間もなく原因不明の下痢の症状が続き、一週間の入院をしたことがありました。結局、原因が分からないまま退院してきた主人に、私は「ご信心していながら御利益がいただけないなんて、恥ずかしいと思わないんですか」と言ったのです。すると主人は這うようにして二階に上がり、十分もお看経をさせていただいたでしょうか。みると白蛇のような回虫を口から吐き出しておりました。一步間違えば命にかかわるところでしたが、その後は適切な治療で快復し、御利益の不思議さに本当に驚かされたものでした。

また、電動ノコで足を切断しそうになったこともありました。帰ってきた主人のズボンに、畑を耕したようにズタズタになっておりましたが、足には傷一つなく、主人も帰るなり早速御宝前に御礼のお看経をさせていただいておりました。

昭和四十六年、私たちは本籍のある松山に戻り、松風寺でご奉公させていただくようになりました。そして主人が連合長の大役を務めさせていただいた昭和五十六年、御導師に認められて得度のお許しをいただき、昭和六十三年に寂光に帰るまで、まじめ一筋のご奉公に残りの人生を捧げたのです。私もそんな主人に見守られるように、今日まで大過なく過ごすことができたことと随喜をいたしております。

こうして主人と巡り会うことで、最高のご信心をさせていただく果報を得ながら、凡夫の性で罪障を起こし、御宝前さまからお罰をいただいたことがございます。平成十五年九月三日のことでした。

この日は晩の七時から、ご老尊の祥月御命日の役中御講がありましたが、どういうわけか九連合は私と国塚カホルさんの二人しかご参詣できず、他の方の御布施をお預かりすることになりました。そのとき「こんな年寄りにだけお参りさせるのなら、もう行かん」と愚痴をこぼしてしまったのです。お叱りは観面でした。九日の寺内のお掃除当番で、二階厨房の外に水を汲みに出たところ、私のソックスが突き出た釘に引っ掛かって倒れてしまい、その拍子に左足の付け根を骨折してしまいました。大騒ぎの末、私は救急車で病院に運ばれました。そのとき私は、役中御講の日の罪障を思い出して、御法さまに心からお懺悔申し上げました。それからは苦痛らしい苦痛もなく、手術に手間取っているように見えることが、

お助行してくださっている皆さんに申し訳ないと思えるほど冷静になることができました。

手術後の経過も良く、入院から二か月足らずで退院し、それから今まで朝参詣を一度も欠かさず、元氣にお参りさせていただいております。

実はそのとき、娘も鼓膜に穴があいているとのことで、手術の申込をして部屋が空くのを待っている状態でした。しかし、私の急を聞いて神戸から駆け付け、看病やら世話をしてくれ、手術のあとも毎週松山と神戸を往復し、大変迷惑をかけました。私が落ち着いたので、娘もようやく病院に行けるようになり、診察を受けたところ、「状態が良くなっているので、今すぐ手術をしなくてもよい」という朗報をいただくことができました。私の怪我で、普段より真剣に御題目をお唱えすることができたお陰をいただいたのでしょう。あれから一年半、娘は今も手術をせずに、元氣に過ごしております。

現在の私は、教務の家内であったということから、御導師さまや奥さまにお心遣いをいただくのが大変心苦しいのですが、娘も西宮広宣寺でなんとかご奉公をさせていただいておりますし、孫たちも皆結婚し、曾孫も元氣にしております。松山に帰った息子も毎朝朝参詣に連れてきてくれ、こうして家族が御法さまに見守られて毎日元氣に過ごす幸せを思うとき、これも主人のお教務としてのご奉公の功德をいただいているんだと、心から喜ばせていただいております。

これからも主人の遺してくれたご信心に励ませていただき、家族が立派に法灯相續できますよう生涯かけてご奉公させていただきます。

ありがとうございました。

(平成十七年一月二十三日発表)

改良のきっかけとなった闘病生活

第十連合第二大歓組 高野友治

ありがとうございます。

私の信心改良のきっかけとなった、突然の病についてお話しさせていただきます。

平成十四年九月、私は宇和島店の勤務から、以前に勤めていた古巣の三島川之江店へと転勤になりました。引継ぎも順調に行き、三日目の夜には友人と食事に出かけてビールも飲み、場所を変えようと歩いていたときのことで、私は急に気分が悪くなり、突然意識を失って倒れてしまいました。

気がつく病院のベッドの上でした。「これは大変なことになっている」と感じました。CT・MRIの検査で、首筋の動脈が七十パーセント詰まっていることが分かりました。病院からは「血管撮影が必要なので、入院してください」と言われ、事態は思わぬ方向に動いていきました。

九月二十一日、自宅に近い愛大病院に入院することになりました。再検査の結果も、血管は同じ状態でした。問診で胸の痛みを伝えたところ、内科で循環器の検査を受けるよう指示され、心電図やエコーの検査を受けました。その検査の途中で、先生の動きが慌しくなりましたので、不安を感じていましたら、心臓の四つの弁のうち、一つが動いていないことが分かり、これが倒れた原因と診断されました。

手術は急ぐとのことで、この急展開に私の頭の中は真っ白になりました。しかし、入院のときに懐中御本尊さまをお供していただきましたので、私は必ず護っていただけると信じ、ベッドで毎日「南無妙法蓮華経」と口唱しました。お寺で毎朝「当病平癒」のご祈願をしていただき、単身赴任で週末にしか帰ってこない弟も、毎週日曜の朝参詣のあと御供水を届けてくれましたので、私も毎日の口唱と共に気持ちが落ち着いて、前向きに手術の日を迎えることができました。

脳外科と心臓の手術は、十二時間に及ぶ大手術になりましたが、お陰で無事成功へと導いていただきました。通常なら五～七日間かかる集中治療室での治療も三日で済み、個室に移ることができました。手術後は幻覚に苦しみ、睡眠も取れない状況でしたが、御題目を唱えることで、気力・体力共に快復に向かっていきました。そしてこれらはすべて、御宝前さまのお陰と感謝させていただきました。

この体験を通じて、今回は御宝前さまと亡き父の信心、そして家族の信心に助けられたとつくづく感じました。今は仕事も松山勤務となりましたので、今まで仕事を口実に御宝前に座ることが少なかったことを反省し、毎朝お看経をしてから出勤するように改良できました。今後は子供たちにもご信心の有難さを感じさせ、信行相続ができますよう励んでまいりたいと思っています。

ありがとうございました。

(平成十七年一月三十日発表)

朝参詣の改良でお教化成就

第一連合第二妙泉組 清水信隆

ありがとうございます。

去年は年男で新年を迎え、思い出に残るご奉公の一年となるよう三日の新年初総講で祝杯を受けました。五月三日には母の二十三回忌法要を御導師にお勤めいただくことも決まり、「久々に家族・親戚が一同に会して、とても賑やかになるぞ」と楽しみにしておりましたので、よい一年であることを願って新春を迎えたのです。

ところが、一月三十一日の仕事に胃が痛みはじめ、薬で治まらないので病院に行くことになりました。検査の結果、石が見つかりました。胃カメラやいろいろな検査をしましたが、そのときはほかに悪いところもなく、ただすれたような傷が見つかったので、組織を採って詳しく検査することになりました。

その後は痛みも治まり、安心しておりましたが、組織検査の結果は「この傷を放って置くと二～三年後に癌になる可能性がある」とのことで、そのまま日赤に移って、二月十七日に内視鏡による手術をすることになりました。

三月九日には胆石の手術も行いました。相継ぐ手術でしたが、お陰さまで術後の経過も良く、お助行を頂戴した御利益を身を以って感得いたしました。三月二十日には退院し、御宝前さまのお給仕をして、長い間のご不敬のお懺悔と、当病平癒の御礼のお看経をさせていただきました。翌日の吉田哲彦さんの

家ででの連合御講にもご参詣できました。そして、こうして元氣でご奉公させていただけることの有難さを改めて思い、心から随喜をさせていただきました。

あとから聞いた話によると、癌になったかもしれないという傷は、普通は見逃してしまうほどの小さなもので、日赤のお医者さんも「よくこんな小さな傷を発見できたなあ」と感心しておられました。胃の痛むのがもう少し遅かったら、五月の母の二十三回忌法要も、お勤めできなかつたかも知れません。傷の発見が遅れていたら、癌を発症して残りわずかな人生になっていたかも知れません。それを思うと、このご信心を残してくれた両親に、感謝の気持ちで一杯になりました。

去年はそうした経緯で、年頭から病氣をして御法さまに助けていただきましたので、御宝前さまから今一度、ご奉公のできる身体を頂戴した今年こそは、新ためて信心改良し、「何とかご恩返しのご奉公を」と思って新年を迎えました。そして私は、朝参詣の改良をお誓いさせていただいたのです。

もちろん今までも、仕事が休みの日曜日には、朝参詣をさせていただいておりました。しかし普段の日は仕事の時間の関係もあって、朝参詣ができないのは仕方がないと考えておりました。これを改良することにしたのです。副組長の徳永さんが昨年末より身体を壊され、朝参詣ができなくなっておられましたので、「代わりに私が」という気持ちもありました。

朝参詣と言いましても、普段の日は仕事の始まる時間が早いので、無始已来の言上があがる前に失礼しなければならないのですが、それでも今年は、寒参詣に皆参させていただくことができました。すると観面に御利益をいただき、早くも寒中にお教化を成就させていただくことができたのです。

私は普段から、御法門で聞かせていただくご信心の話を、誰にでもお伝えするよう心がけておりますが、先日いきつけのお店で知り合った西田弘子さんに、いつものようにご信心の話をしておりましたところ、この方が元第一妙泉組所属の西田テルさんの娘さんであることが分かったのです。私は「御法さまからご縁をいただいた」と感じて、早速「お寺の近くに住んで、御題目にご縁の深い方が、ご信心をしないのでは罰が当たりますよ」とお折伏をさせていただきました。西田さんのご姉妹が、現在松風寺でご信心をされていることもありましたので、西田さんは素直に折伏を聞いて入信されたのですが、なんとも不思議なご縁をいただき、早速去年の病氣平癒の報恩ご奉公がさせていただけたと、心から喜んでおります。

しかも有難いことに、西田さんは入信以来、お友達を連れて寒参詣にお参りされるようになり、その方もお教化させていただくことになりました。気持ちを入れ替え、寒参詣に臨ませていただいたことで、今年は早々から二人の教化子を授かるという身に余る徳を頂戴することになったのです。

「御利益は改良から」と学ばせていただきますが、この度はそのことを体験で教わりました。どうぞ皆様も朝参詣にお気張りください。素直にご奉公させていただけば、必ず御利益をいただきます。

ありがとうございました。

(平成十七年二月六日発表)

ありがとうございます。

本日は私が交通事故に遭ったときの体験をお話しさせていただきます。

平成十一年の一月のことです。年末に松山に戻っておられた知り合いのご信者さんが、二日には自宅にお帰りになると聞き、私は何かお土産物を差し上げようと思って、一日の午後一時頃に大街道へ自転車で出掛けました。しかし、あいにく元旦で、銘菓の本舗も三越デパートも休業でした。そこで私は、道後の商店街かホテルの売店に行こうと思い、東雲通りを道後方面へと向かいました。

ロープウェイ乗り場の手前に停車中のバスがありましたので、その前を横断しようとしたときです。十分に安全確認はしたつもりでしたが、バスの後ろから走ってきた自動車が、バスを避けて車線変更し、突如私の目の前に現れたのです。運転手はバスの影で私が見えなかったのでしょうか。追突の瞬間、車のボンネットの上にはね上げられた私は、そのまま意識を失ってしまいました。

救急車で搬送された救急病院は、事故現場から百メートルほどの場所にありました。病院の廊下の車椅子の上で気を取り戻した私は、しばらく何が起こったのか分からず、周囲を見回しておりました。そんな私に気づいた看護婦さんが近づいてきて、事故に遭ったことを教えてくれ、「家に電話しますか？」と尋ねてくれました。事故の状況を聞きながら、私は少しずつ、車にはねられた瞬間を思い出していきました。そして、もしボンネットの上に乗らず、車と直接ぶつかっていたらどうなっただろう。あるいは車の下に巻き込まれていたら、大変なことになっていただろう……などと思い、改めて御法さまに護っていただいた有難さに感謝をさせていただいたのです。

検査は、しばらく待たされてやっと始まりました。身体の方はどこも外傷がありませんでしたが、しばらく肩や首のリハビリ治療を続けることになりました。また、念のため、医大の脳外科でMR Iの診察を受けるように言われました。家族にも、日常生活の中で少しでも異常があれば申し出るよう指示があり、とりあえず異常はないものの、事故の様子から予断を許さない状態であることが分かりました。が、ひとまず無事に帰宅することができましたので、早速御宝前に災難除滅の御礼を言上して、お看経をさせていただきました。

お陰さまで、リハビリを始めて三日目に、医大でMR Iの写真検査と診察を受けましたが、結果は「心配ない」というものでした。その後の毎日の生活も特に異常はなく、治療も十日ほどで打ち切りになりました。

日々の如説修行の功德で、信者は御法さまから護っていただけると教わります。私の組は、ご信者さんが多い割りに役中のご奉公をしてくださる方が少なく、組内のご奉公も私と家内の肩にかかっているような状態で大変ではありますが、それでも真面目にコツコツご信者さんのお世話をさせていただいていると、こうした不慮の災難にもご加護がいただけるのだなぁと感じました次第です。

ありがとうございました。

(平成十七年二月十三日発表)

母の形見の佛立信心

第三連合第一勸信組 山本勝美

ありがとうございます。

私は、母から法灯相続をした二代目の信者です。母・山本キヌ子は、恵まれた実家で何不自由なく育ち、女学校にも通っておりました。戦前にすでにテニスをしたりして、とても活発な少女時代を過ごしたようです。ところがそんな母も、結婚を期にお舅さんのお世話などの慣れない生活をするようになり、心臓の疾患で身体を壊して、「このまま死んでしまうのでは……」と思うほど人生が変わりました。そんな折、三津浜に住んでおりましたので、ご近所の玉井ウメヨさんのお折伏をいただき、本門佛立宗に入信することになるのです。

その頃、ちょうど岩永さんの奥さんがご病気で、お助行を受けておられましたので、早速一緒にお助行を頂戴することになりました。入信当初は父の理解が得られず、御宝前をお迎えすることができなかったのですが、皆さんのお助行をいただく中で「やはり自宅に御本尊さまをちゃんとお祀りさせていただこう」と思うようになり、必死で父を説得して御本尊さまが奉安できたと申します。

それからは自宅で連日のお助行をいただいて、お陰で母の身体も快復しました。元気になった母に手を引かれ、子供の私も随分遠くのお宅まで御講参詣をさせていただいたものです。

私が成人して住いを今の清水町に移し、母と二人で生活するようになってからも、母は厳しく私にご信心を躰けました。たとえば私がお看経をしないととても機嫌が悪く、口も聞いてくれませんでした。私にしてみれば、早朝から家事をして仕事に行き、疲れて帰ってからも掃除洗濯と、「とてもお看経どころではない」と言いたい状況でしたので、ときどき反抗して喧嘩になることもありました。しかし、今になって思うと、それも私のことを思うお折伏だったことが分かります。

お陰で私は、御法さまに護られて生きる信者となり、たびたび御利益をいただいて今日まで過ごしてまいりました。たとえば自転車を離せない私は、今まで何度か危ない目に遭いましたが、大事故につながることはありませんでした。

記憶に新しいところでは、平成九年の二月のことです。昼ご飯に家に帰っていた私は、仕事場に向かって樋又通りを西に、本町方面へと自転車を走らせていました。すると突然、信号待ちで混み合う西向きの車の隙間から一台のタクシーが右折してきて、そのまま私に追突をしたのです。更に悪いことに、タクシーは倒れた私にもう一度当たってきて、私は自転車のハンドルで強く胸を打ちました。すぐにタクシーで病院に連れて行っていただきましたが、そのときは運転手さんも私も、たいへんなことになったと考えていました。ところが診察の結果は、不思議なことに胸骨と肋骨の打撲だけで骨折もなく、入院の必要もないというものでした。治るまでに三ヶ月もかかりましたが、事故の大きさに比べて通院だけで済んだのも、母の躰けてくれたご信心のお陰だと感じました。

平成十四年八月十九日、母は八十八歳の天寿を全うして帰寂しました。私の幸せのために厳しくご信心を教えてくれた母に、報いることが少なかったように感じますが、平成六年に水口局長さんのご助力で家を新築し、丸八年、新しく気持ちのよい住まいで母に暮らしてもらえたことが、生前のせめてもの親孝行になったのでしょうか。

亡くなった当初は、胸にぽっかりと穴があいたようで寂しく、生活に身が入りませんでした。御導師の奥さまやご信者の皆さんに励まされ、このままではいけないと信心を改良させていただき、朝参詣から改めさせていただきました。

今は無事退職して、母の遺してくれたご信心を頼りに、これからの人生を送りたいと思っております。私が立派な信者に育ち、多くの方に御題目の有難さを伝えられるようになることが、母へのほんとうの恩返しと肝に銘じて、お寺参詣や御講参詣、そして毎日の口唱に励ませていただきます。

ありがとうございました。

(平成十七年二月二十日発表)

早く元気にご奉公がしたい

第四連合第二長寿組 林 辰次

ありがとうございます。

私は以前、まだ勤めていた頃に、会社の定期検診で心臓肥大症と診断されましたが、定年までは特に身体の異常がなく、元気しておりましたので、あまり気にせずにおりました。定年後は、仕事をしていた頃に出来なかった分を取り返すつもりでご信心をさせていただくようになりました。毎日の朝参詣を中心に、事務局のご奉公、組内のお世話と、少しでも御法のお役に立つことを楽しみに、充実した毎日を過ごしていたのです。

そんな平成十四年のことです。突然、少し小走りをするとう息苦しく感じるようになりました。近くの病院で診てもらおうと、「肺に水が溜まっているので、注射で抜きましょう」と言われ、月に二回、病院に通うことになりました。しかし、体調は悪くなる一方で、だんだん息苦しさがひどくなりました。大好きなお酒も飲みたくなくなり、食事はパンと果物しか摂れなくなりました。体重はどんどん落ちて、骨の上に皮がくっついたような姿になりましたが、医師に相談しても、具体的に治療が変わるわけではありませんでした。そこで「これはもう、御宝前にお縋りするしかない」と思い、体調の悪い中を朝参詣に励ませていただきました。しかし、五月頃には隣に座るご信者さんにも息苦しい音がはっきりと聞こえるようになり、「他の病院で診てもらおう方がいい」と心配されるようにもなりました。

私はもともと、あまり病院が好きではなかったのですが、皆さんの勧めを聞いて他の病院で診ていただくと、心臓に水が溜まっているのが原因と分かりました。新しい病院では、利尿剤で様子を見ることになり、併せて心臓のお薬を服用するようになりました。効果は半月ほどで現れました。息苦しさが徐々に楽になり、食事も以前のように摂れるようになりました。体重も少しずつ元に戻って、逆に心臓に負担をかけないために、節制をしなければならなくなりました。皆さんからも「顔が元気な頃に戻ったよ」と言っていただき、自分でも確実に良くなっていると実感できました。

こうして少しずつ快復したのは、治療が変わったのも原因ですが、私は一番辛い頃、それでも頑張っ

て朝参詣をさせていただいた御利益だと思っています。なぜなら、病院嫌いの私ですから、朝参詣を休

んで家で養生していたら、きっと病院を変えることなど考えなかったと思うのです。御法さまがご信者さんの口を借りて、病院を変えるよう教えてくださったのだと感じ、早速、御宝前に経過良好の御礼を言上していただいて、つくづくお陰を頂戴したことに感謝させていただきました。

少し元気になった頃、私は油断して、やめていたお酒を毎晩二～三杯飲むようになりました。すると、三ヶ月ほどして前のように息苦しくなり、横になっても一晩中苦しむようになりました。まだまだ本調子ではなかったのです。病院で先生に状態をお話しすると、お酒も一杯ぐらいはいいが、あまり飲まないようにと注意されました。また先生からは、酸欠で苦しいようなら、携帯用の酸素ボンベを持つことを勧められましたが、自分の力で呼吸ができるようになりたいので断りました。

元気になってきたようで、まだ油断はできません。今でも歩くのは普通の人のお半分の早さですが、それでも五十メートルほど歩くと息苦しくなり、少し休んでは歩きはじめるような状態です。ただ、有難いことに、そんな私を見かねて、今は息子がお寺まで送ってくれるようになりましたので、朝参詣は続いています。

早くご奉公がしたくて気があせるのですが、今度は十分に養生し、一日も早く以前のようなご奉公のできる身体に戻りますよう、御法さまにご祈願をさせていただき毎日です。

ありがとうございました。

(平成十七年二月二十七日発表)

お助行の有難さ

第五連合第一本清組 川本キサエ

ありがとうございます。

私は昭和二十九年、亡き夫・栗林恒信と縁有って結婚し、主人の母の栗林茂子に導かれてこのご信心にお出値いしました。当時の私には、これといった悩みもありませんでしたが、今から思えば時恰も「開講百年」を祝う奉賛ご奉公のまっ只中でしたので、義母も報恩のお教化成就を誓願していたのでしょう。勧められるままに、逆らうこともなく入信させていただきました。やがて二人の女の子にも恵まれ、何不自由のない平穏な生活がしばらく続きました。

当時の私は、お寺の御修行日と組御講には必ずご参詣させていただこうと思い、義母に連れられお参りしながらご信心を覚えていきました。幸い道後樋又に住んでおりましたので、お寺参詣をするには大変恵まれておりました。

主人は、左官さんの使う土を運ぶ仕事をしておりました。元来お酒が好きで、身体を使う仕事をしてきたこともあり、昼間でも一杯飲んでしまう日が度々ありました。そんなお酒好きが災いしたのでしょうか。やがて重度の肝硬変を患うようになりました。結婚して十年も経たない頃のことでした。

病状は次第に悪化し、主人のお腹はパンパンに腫れていきました。治療のために直接お腹に針を刺して水を抜くのですが、指定された分量の倍の水を抜いてもなかなか楽にならず、入退院を繰り返すばかり

りでした。

「どうして主人はこんなにも苦しまなければならないのか」と考えているうちに、ふと思い当たることがありました。と言うのは、主人がまだ元気だった頃、私が御宝前でお看経をしているのが気に入らないと言って、お厨子ごと外に投げ出そうとしたことがあったのです。私は驚いてお厨子を抱え、義母に助けを求めに走りました。そのときのことを思い出し、御宝前にご不敬をお懺悔して口唱に勤めましたが、肝心の主人は罪障が深く、なかなか真剣にお縫がりしようという気持ちになれずにおりました。

そんな私たちの状況を見かねて、まわりのご信者さんが一週間、また一週間と間隔をおいて、お助行をしてくださるようになりました。長い闘病生活でしたから、それはそれは大変なご奉公だったと思います。坂本津貴美さんや岡福一さんなどは、特によく来られて励ましてくださり、挫けそうになる私を支えてくださいました。根気よくお助行くださるご信者の皆さんの熱意を受けて、「私が負けてはいけない」と思い直し、私も初めて百本祈願に挑戦して、一週間で達成させていただくことができました。

お陰さまで主人の容態は徐々に良くなり、肝硬変も主治医が驚くほど快復して、「学会で発表したい」と言っていただくまでになりました。ご信者方のお助行の功德をいただき、御法さまが私の願いを受け止めてくださったことに、心から感謝をさせていただきました。

この御利益をきっかけに、初めはご信心に批判的だった主人も、御講のときなどは後ろに座ってお参りするようになりました。あまり口には出しませんでした。主人もご信心の有難さを、それなりに感得できたのだと思います。

ただ、天寿は如何ともし難く、身体が元気になって「やっと元の仕事ができる」と喜び、少々無理をしたのが命取りとなりました。行年四十六歳、まだまだこれからというときに、主人は臨終を迎えたのです。

しかし今思えば、私はこの主人の臨終を通して、ご信心の有難さをつかまさせていただいたと思います。根気よく連日のお助行に通ってくださったご信者さんのご信心、熱烈な口唱と温かい励ましの言葉の中で、重度の肝硬変が医者も驚くほど快復し、主人は四年の増益寿命を得たのです。ほんとうに、お助行の尊さを教えていただいた体験でした。以来、私はどなたのお助行であろうと「お助行」と聞けばお参詣し、共に御題目をお唱えさせていただいております。

ただ、気になるのは、最近はお教化のお助行や病気の方のためのお助行、また婦人会の毎月十二日のお助行にしても、昔に比べると熱心さが欠けているように感じることです。育成のお助行や手術後のお助行も、油断しておろそかになりがちです。組内に迷惑を掛けるからと言って、遠慮されるお話しもよくお聞きします。しかしお助行は、佛立信者にとってとても大切なご奉公だと思います。させていただく方も受ける方も、どちらも御利益がいただけることを多くの方に知っていただくために、私はこれからもお助行に精一杯努めさせていただきます。

ありがとうございました。

(平成十七年三月六日発表)

家族の人生を変えた朝参詣

第六連合第一本因組 梅木由紀美

ありがとうございます。

私が入信いたしましたのは、昭和五十二年、主人と二人頑張って家を建て、半年ほどした頃のことでした。突然、主人が両足の膝の関節に痛みを感じるようになり、愛大病院へ診察に行きますと、両膝の関節の軟骨に亀裂が入ってかすかに繋がっている状態で、軟骨を取り出して人工軟骨に入れ替えなければならないと診断されたのです。

苦労して家を新築したばかりの喜びも束の間でした。このままでは主人は働くこともできなくなります。この予期しない不孝な出来事に、家のローンのこと、小学校三年生と五年生の二人の子供の将来のことなど、これからどうしたら良いのか、私は途方に暮れました。そんなとき、毎朝熱心に松風寺へ朝参詣をされていた知人にご信心を勧められ、藁をもつかむ思いで入信させていただいたのです。

次の診察日まで、私は知人と朝参詣に励み、御宝前さまにお縋りして、たどたどしいながらも一心に御題目をあげさせていただく日が続きました。そして、いよいよ入院の日を決めるべく、主人といっしょに覚悟を決めて病院へまいりました。

すると、その日はどうしたのか、最初に診断してくださった教授が不在で、若い先生の診察日となっております。そしてレントゲン写真をご覧になった先生から、「まだ若いし、かすかに軟骨は繋がっているのですから、このまま手術をせずに様子を見てはどうですか。手術をすれば、半年近いリハビリや、いろんな問題が生まれますから」と、まったく予期しない言葉をいただいたのです。私は気が抜けそうになりました。主人と二人、命拾いをしたような、ホッとした気持ちで病院を出て、帰る道すがら「御利益をいただいた」という喜びが溢れてきたのを、昨日のこのように思い出します。

主人は二～三年は湿布をし、寒い冬はサポーターを当てたりしましたが、それから二十七年、今日に至るまで病院のお世話になることなく過ごし、今では二時間近いジョギングやゴルフも楽しんで、仕事も現役で頑張っております。朝参詣で必死にご祈願をした数日で、私たち家族の人生が大きく変わったことを思うと、ほんとうにご信心に出会えた有難味を感じます。私の家族は、長い年月にわたり、御法さまにお護りいただきました。主人の病気のほかにも数々の御利益をいただいて今日が在りますこと、感謝の気持ちでいっぱいです。

昨年暮れから、朝参詣に毎日お参りできるようになった私は、奉賛歌の一節を「まもりかがやく佛立の、教え尊し、きわみなし」と唱和させていただきながら、改めて胸に熱いものを感じるようになりました。これからもご参詣と御法門聴聞を重ね、家族そろってご信心が深く持てますよう、信行に励んで参ります。

ありがとうございました。

(平成十七年三月十三日発表)

母のお陰を感じて

第八連合第二信要組 野村久子

ありがとうございます。

私は物どころがついたとき、母が熱心な信者でしたので、自然と御題目を唱えておりました。小さな頃の思い出として、よく母に御講席に連れていってもらい、たくさんのご信者さんに可愛がっていただいたのを覚えております。

ですから、小さい時から何かあると、私はすぐに御法さまにお願いをしていました。歯が痛くて眠れない夜など、「どうか寝られますように」と拝みながら、知らない間に寝ているような子供でした。母がいつも御宝前を大切に、一生懸命にご信心をする姿を見て育ちましたので、自然とご信心の大切さを身につけることができたのだと思います。

子供の頃の私は身体が弱く、母にはずいぶん心配をかけたようです。母は亡くなる前まで、「私よりあんたの方が早く亡くなるのではないか」と心配しておりました。そんな私が、今まで大病をすることもなく過ごしておりますのも、御宝前さまに護っていただいているからだと思います。

数年前に仕事を辞め、時間が自由に使えるようになると、知らず知らずのうちに足がお寺へ向くようになりました。今もご信者の皆さんに可愛がっていただき、事務局のお手伝いや婦人会のご奉公をさせていただく中で、改めてこのご信心の有難さを知ることができました。これも母のお陰と感謝をさせていただいております。

御法さまのお護りをいただいて、毎日を無事に過ごすという御利益を頂戴する私ですが、一つだけ悩みがありました。平成十三年に定年退職をした兄と一緒に暮らすようになったのですが、兄はまったく信心気がなく、私がお寺参詣やご奉公に出掛けると、「お寺のために出掛けすぎる」と文句ばかりを申します。そんな兄を気遣い、兄の留守の間にご参詣をしたり、遅くなる時は夕食の段取りをしてから出掛けたりと工夫をしたのですが、それでも時々叱られて、喧嘩になることもありました。

兄とご奉公との間で、辛い思いをしていた私は、昨年の暮れに御導師さまにご相談に上がりました。御導師さまは、早速連合御講の帰りに家に寄ってくださり、兄に会ってお折伏をしてくださいました。それからは兄も、少しはご信心を理解してくれたようで、以前ほどうるさく言わなくなり、お陰で今年のご参詣がしやすくなりました。

そんな今年の二月下旬のことです。兄が尿管結石になりました。病院でいただいたお薬を飲んでも、漢方を煎じて飲んでも尿が出にくく、苦勞をしているようでしたので、お供水さんを勧めたところ、尿がよく出るようになったと喜んでくれました。

以来、あれだけご信心に理解のなかった兄が、「お寺へ行ったらお供水をもらってきてくれ」と私に言ってくれるようになりました。改めてお供水さんの有難さを思い、また、私の悩みを御法さまが解決してくださったことに感謝させていただいております。

今はこのことをきっかけに、兄が一日も早く母のご信心を相続できれば、どんなに寂光の母が喜ぶかと思ひ、日々の口唱をさせていただく毎日です。

母がご信心を遺してくれたお陰で、私の今の幸せがあることを忘れず、今度は私が兄や息子に、しっ

かりとご信心を伝えられるように努力します。

ありがとうございました。

(平成十七年三月二十日発表)

日頃のご信心の大事さを知った体験

第七連合第三事行組 高橋正文

ありがとうございます。

私の母が病気になり、西条佛立寺の山本さんという方の勧めで入信したのは、私が小学校五年生のときでした。

母の入信以来、私は母を自転車の後ろに乗せて、お寺参詣に励むようになりました。母の病気のこともありましたが、お寺に行くと、大人の方たちが「偉いな」と誉めてくれるのが嬉しくての参詣であったと思います。

そのまま私はご信心に親しむようになり、大学進学で名古屋へ行ってからは、市内千種区の顕正寺に所属して、秋田御導師に可愛がっていただきながらご奉公を覚えました。そんな名古屋顕正寺時代に頂戴した御利益を、今日をご披露させていただきます。それは今からちょうど三十五年も前、大学も卒業して名古屋で勤めを始めた二十五歳のときでした。

当時の私は、顕正寺の青年会員としてご奉公しておりました。小さなお寺のことですから、御会式前は婦人会の方たちと徹夜で準備をするなど、ご奉公もたいへんでしたが、我ながら今よりは随分真面目にご信心をしておりました。

ただ、若い時分のことでしたので、私生活の方ではよく遊んでおりました。その頃は、時代も今よりはおおらかだったのでしょう。週に何日かは会社の寮や上役のお宅に仲間が集まり、お酒を飲んだりマージャンをして過ごしましたが、徹夜になることも珍しくありませんでした。私が事故を起したのは、そんな徹夜明けの勤務中のことでした。

その日、私は鋼材配達のため、知多半島の滑床方面に向かって二トントラックを運転しておりました。その途中、徹夜のマージャンがたたって、ゆるやかなカーブのある土手の上の道で居眠りをしてしまい、土手の左下の田んぼへ落ちてしまったのです。

ハッと気付いてブレーキを踏みましたが、積荷が重くて停まりません。四百キロもある鉄のかたまりが、鈍い音を立てて運転席の後ろにズレてくるのを背中で感じました。やがてトラックは横転し、私は記憶を失いました。

私が意識を取り戻したのは、車が停まってからでした。横倒しになった車のダッシュボードから、物が落ちてきました。私は咄嗟に、フロントガラスやドアのガラスが割れて落ちていないか確かめ、次に自分の身体を調べました。足を少し擦りむいていましたが、不思議とそれ以外に異常はありませんでした。空を見上げる助手席の窓を開けてよじ登り、車の外に出ると、土手の上から数人の人がこちらを見

ていて、「大丈夫か」と声をかけてくれました。赤面ものです。私は会社に電話を入れて、クレーン車を呼んでもらいました。

トラックは、途中の電柱に荷台が引っかかったお陰で、土手の下まで落ちずに済んでいました。しかし目の前には、沼のような水溜りが迫っておりました。土手を落ちたときのスピードは、時速十キロ程度だと思いますので、一秒間に約三メートル進みます。それこそ一秒違えば沼に突っ込んで、私は大怪我をするか、悪くすれば死んでいたかも知れません。あとで電力会社の人が電柱を調べにきましたが、修理の請求や罰金はありませんでした。荷台が曲がるほどの強い衝撃があつたにもかかわらず、重い鋼材を積んだトラックを、一本の電柱が無傷で支えたことも不思議でした。

仏教には因果の教えがあります。自らの行いが因となり、その積み重ねが一つの結果として現れるというものです。もちろん、因となるのは意識しての行動ばかりではなく、私たちの生活の大部分を占める無意識の行為も因となるのですから、考えてみるとこれほど恐ろしく、また峻厳な法則もありません。その、知らず知らずに積み重ねる行動が、仏さまの説かれる功德行を中心とするか、罪障を柱にしたものであるかは、当然大きな違いとなります。

あの事故を起した日、そんなことを考えながら、ご信心の有難さを思いました。確かに事故の直接の原因は徹夜で遊んだことですが、しかし母が教化を受けてご信心に出会い、ご信者さんに誉められて参詣し、お寺のご奉公をさせていただくようにもなって、自分の知らないうちに仏さまの徳をいただけたことが、九死に一生の御利益につながったのだと感じました。そしてそれが、私が日頃のご信心の大切さを知る体験ともなりました。

今、この若いときの御利益を思い出しながら、最近はその真面目さを忘れていたなあと反省しています。いざと言うときに、ご信心の徳で護っていただくことができますよう、初心に帰って日々のご奉公に努めさせていただきます。

ありがとうございました。

(平成十七年四月三日発表)

家族が護られていることを実感

第九連合第一妙唱組 新山千鶴

ありがとうございます。

私たち家族がいただいたたくさんの御利益の中から、平成十年、香川県高松市に住んでいた頃の出来事をお話します。

平成十年八月、長女の泉が幼稚園年長の夏休みに入ったばかりのとき、突然四十度の高熱が出たことがありました。泉は本当に元気な子で、それまでも、その後にも、病気らしい病気はこのときばかりです。病院の診断は夏風邪。泉は自分でお供水をいただいていたのは大きな声で御題目をお唱えしていましたし、そのときは私も、二～三日で治るものと考えていました。

しかし二日後のピアノの発表会には、四十度の熱は下がりませんでした。そして一週間後、楽しみにしていた松山での薫化会サマーキャンプの日が来ても、四十度の熱は全く下がらなかったのです。

血液検査をしても、点滴で抗生物質を投与しても熱は下がらず、解熱剤で熱を下げては食事をさせる以外に、できることはありませんでした。さすがに辛抱強い泉もぐったりしてきましたので、私も次第に不安になっていきました。そしてとうとう入院することになりましたが、原因も分からず、抗生物質も効いていないということで、病院でも二十四時間の栄養点滴以外に治療の仕様がありません。薬といえば解熱剤だけで、また一週間が過ぎました。

四十度の発熱は、二週間目になりました。血液検査や超音波検査、髄液を取るなどあらゆる検査をしましたが、原因は依然として見つかりません。そこで医師からは、詳しい検査のため、翌朝にも香川医大へ転院するよう勧められました。

私は「困ったことになった」と思いました。と言うのも、泉が入院していた病院は自宅から近く、病室の窓から高松妙泉寺が見える場所でしたので、松山から母に来てもらい、自宅とお寺と病院を行ったり来たりすることが出来ました。しかし香川医大は距離も離れており、まだ上の裕樹も下の拓実も小さかったので、遠い場所への転院など考えられませんでした。

不安な思いで主人に相談をすると、「明日返事をするのなら明日決めればいい。今晚中に熱が下がるようご祈願しよう」と言われて、はっとしました。私は、一番大事なことを忘れていたのです。高松妙泉寺では毎朝ご祈願を上げていただいていたのですが、今、私たちにできることは、御法さまにお縋りすることしかないのです。

早速松山の御導師に電話をして、お助行していただけるようお願いしました。家では主人と子供たちがお助行してくれました。私は病室から妙泉寺の御宝前に向かい、必死の思いで一晩中御題目をお唱えしました。するとどうでしょう。不思議なことに、その晩十二時ごろから少しずつ熱が下がり始めたのです。

泉の熱は、翌朝には三十七度台になり、その日のうちに平熱に下がりました。そしてその翌日には食欲も出て、転院することもなく無事退院することができたのです。

血液を詳しく調べていただいて、二週間後にパラインフルエンザというウィルスによるものだったことが分かりました。私たちは御利益がいただけたという喜びで一杯でした。先生から「疑われていた重い病気ではなかったことや、四十度の発熱が二週間続いても合併症が起こらなかったこと、兄弟たちに影響がなかったことなど、ほんとうに良かったですね」というお話を聞かされ、泉だけでなく兄弟までも、しっかりお護りいただいていたことにも気づきました。

私達家族は、毎日が順風満帆というわけではありません。予期せぬこともいろいろと起こっています。しかし家族みんなが御法さまを信じ、ご信心の大切さ、ありがたさを感じているので、どのようなことが起こっても慌てることなく、一つ一つ乗り越えてきていると思います。

御法の中で生かさせていただく有難さを、自信を持って人にお勧めできるよう、これからも努力していきたいと思います。

ありがとうございました。

(平成十七年四月十日発表)

居眠り運転を御法さまに起こしていただく

第十連合第二大歓組 馬場真弓

ありがとうございます。

平成●年の暮れも押し詰まった日のことです。私は高松の妹の家に引っ越すことになった母を手伝うため、住まいのある静岡から、実家のあった伊予市まで車を運転して行きました。母の荷物を無事に高松まで運び、そのまま静岡に帰ったのですが、慣れない長距離運転の疲れと、引越しの手伝いをした疲労もあったのでしょう。高速道路で運転をしながら、だんだんと睡魔が押し寄せてきたのです。

目をこすっても、大きな声で歌を歌っても、一向に目が覚めません。「ああ、こんなことなら、手前のサービスエリアで一眠りしておけばよかったなあ」と思いながら、やがてウトウトと居眠りを始めたようでした。

そのとき、「バァーン！」と大太鼓を叩いたようなもの凄い音がして、私はハッと目が覚めました。一瞬、「車のタイヤがバーストした」と感じた私は、慌てて路肩に車を寄せて点検をしました。ところが、いくら調べても、タイヤのパンクはおろか、破損した形跡も見当たりません。「何の音だったのだろうか？」と不審に思いながら車に乗ると、壊れているラジオの電源が入っているではないですか。「なんで電源が入ったのだろうか。不思議だなあ」と思いながら、ひとまず車を走らせ、次のサービスエリアで一眠りしました。

目が覚めると、高松を出るときに「御本尊さまを入れた箱がない。車の荷物に残ってない？」と母が言っていたのをフト思い出し、念のため車の中を調べてみました。すると、亡くなった父の遺影が入った箱が出てきたのです。「母の荷物は全部降ろしたはずなのに……」「御本尊さまと父の遺影は、母に何度も念を押されたのに、なぜ……」と思いましたが、「ああ、私は父に助けられたんだ。お父さん、ありがとう」と感じて、父に感謝をしました。

早速、サービスエリアから母に電話をすると、母は「ああ、良かったねえ。有難いねえ」と喜んでくれました。そして、「でも、やっぱり御本尊さまがないんだけど、あなた、いっしょに持って帰ってない？」ともう一度尋ねられましたので、すぐに探してみましたが、やはり見当たりませんでした。そして、「父に助けられた命を大切にしなければ」と戒めながら、いつも以上に安全運転で静岡の住まいに戻りました。壊れたラジオが鳴り出したので、気が紛れてずいぶん助かりました。

翌日、車の荷物を整理をされていて、頭をガァーンと殴られたような衝撃を受けました。母の家で降ろしたはずの御本尊さまが、ちょうど運転席の後ろの背中合わせの場所に、父の遺影の箱といっしょに置かれていたのです。私は「ああ、御本尊さまが心配して、父の遺影といっしょについて来られたんだ」と感激して、思わず涙が溢れました。

御本尊さまと父に護られて、私は無事に静岡まで帰ることができました。両親が一生懸命にご信心をしていたお陰で、私まで大きな御利益をいただき、有難いことと感謝をしております。ほんとうに有難

うございました。

(平成十七年四月十七日発表)

長年のご奉公の功德を頂戴して

第一連合第一妙泉組 坂本津貴美

ありがとうございます。

私がこのご信心とご縁をいただきましたのは、終戦後間もなくのことでした。

松山市内は空襲で焼け野原になり、焼失した自宅で呆然としていたところ、ご近所の亀岡のおじさんが「ワシがやってあげる」と言って、焼け跡から材木を集めて我が家を建て直してくださったのです。ほんとうの掘建て小屋でしたが、空襲があってからというもの、ずっと三津の親戚の家で世話になっておりましたので、おんぼろで何もなくても、住む家ができてホッとしたものでした。後に松山市から百円の見舞金が出たので、亀岡さんのお宅にお礼に伺うと、「お金なんかいらん。拾ってきたものを集めただけのことじゃ」と言われて、お礼は受け取ってくれませんでした。ご自分のお宅も大変でいらしたのに、私のために無償で事を計らっていただいたことに、言葉にできない嬉しさが込み上げました。

それから二日ほどして、亀岡さんが尋ねてこられました。そして「ワシは有難いご信心をしとるんじやが、あんたもおしんか(しませんか?)」と言って、いろいろと御利益のお話をしてくださいました。私は即答ができず、「一晩考えさせてください」と申しました。

その頃、戦争ですべてを失った私は「何かにお縋りしなければ生きていけない」と感じておりました。小さな頃から祖母の手に引かれ、よくお寺にお参詣しておりましたので、祖母が昔、仏壇にお米をお供えしていたのを思い出し、何もない自宅でお釜のふたの上にご飯を乗せて、手を合わせたりもしておりました。ただ、知らない宗旨に入ることには、少し迷いを感じました。

そういう状態でしたから、亀岡さんにご信心を勧められて即答できなかったのですが、一晩考えて「これも何かのご縁」と思い、翌朝、早速亀岡さんのお宅に伺いました。「おじさん、ご信心させていただきます」と申しますと、亀岡さんは大変喜んでくださいました。そして「御本尊さまをお供してくる」と言われて、すぐにお寺に出向かれました。

残された私が、訳も分からずウロウロしておりますと、しばらくして大変立派な方が、腰をかがめて焼け跡の掘建て小屋に入って来られました。先住日崇上人でした。

日崇上人は御本尊さまを恭しく奉安され、いっしょに御題目を唱えるようにと仰いました。私が後ろに座って「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経……」とお唱えしていると、お供えされたお水を湯飲みに移し、そっと渡してくださいました。まだ、お供水の有難さも知りませんでしたが、唯々有難く感じて、涙が出るのを抑えることができなかつたことを思い出します。

それからというもの、一生懸命に御法にお縋りし、日崇上人のご教導のままにご信心に励ませていただきました。五十年前の開講百年の記念のご奉公では、第二妙泉組の組長を拝命し、納骨堂の建立や

新本堂の建営に向けて皆を励ましご奉公しました。戦後の復興期でもあり、皆が夢を持って毎日を過ごし、松風寺が大きく伸びた時期でもありました。及ばずながら私も、やがて婦人会長の大役や責任役員まで「ご奉公せよ」と言われるままにさせていただいたものでした。そんなお陰を頂戴して、入信後は病氣らしい病氣もせず、この歳になるまで数えきれないほどの御利益をいただき、御法さまに護られて過ごしてまいりました。そんな私が、昨年は大病をし、奇跡的に助けていただく御利益を頂戴しましたので、少しご披露させていただきます。

平成十六年四月十二日の早朝でした。突然意識が遠くなり、もうろうとしてきたので「これはおかしい」と思い、近所の仙波信美さんに電話をしました。仙波さんはすぐに駆け付けてくださり、私の甥に電話をし、また近くの病院にも連絡して往診を頼んでくださいました。しかし往診に来た医師からは「私の手には負えないので、すぐに大きな病院に行くように」と言われました。そして救急車で、県立中央病院に入院することになりました。脳梗塞でした。

初めは手に麻痺がありましたが、二か月後には松山リハビリテーション病院に転院し、九月には退院することができました。入院当初は食べ物が飲み込めず、長い間流動食のみでしたが、身体の方は不思議と大事に至らず、やがて手の麻痺もとれ、快方に向かいました。その間、御導師さま、奥さまには何度も遠いところをお見舞に来ていただき、毎朝の朝参詣や御講席でもご祈願いただきました。ご信者の皆様にも親切にいただき、この御法さまとご縁をいただいて、本当によかったと改めて随喜させていただく日々でした。

詳しい病名が何だったのか、難しく覚えてしまいましたが、孫が申しますには、医師がカルテを見ながら「これは奇跡だ」と言っていたとのこと。こんな高齢で、しかも難しい病氣にもかかわらず、わずか五ヶ月の入院で済ませていただいたのも、六十年に及ぶご奉公の功德をいただいたものと感得しております。御法さまには、ほんとうにお礼の気持ちで一杯です。

まだ身体の自由が効きにくいので、昔のようにはいりませんが、自宅の御宝前さまにはいつも感謝の気持ちを込めて、御題目を上げさせていただいております。

気がかりなのは法灯相続ですが、東京の娘は地下鉄サリン事件で、間一髪で事件のあった電車に乗り遅れたことがあり、「お母さんのご信心のお陰で助けていただいた」と喜んでおりましたので、早く元気になってしっかりご信心の有難さを伝えたいと思っております。

更に有難く思うのは、ただ今の開講百五十年の奉賛ご奉公の中で、こうして皆様に体験発表をして記念のご奉公に参加をさせていただけることです。半世紀を経て再び本門佛立宗のご開講を祝う大きな節目を体験できる果報に感謝し、これからも微力ではございますが、ご弘通のお役に立たせていただけますよう頑張りたいと感じております。

ありがとうございました。

(平成十七年四月二十四日発表)

両親の背中に学んだ御戒壇建立の功德

ありがとうございます。

多分、私が中学校に入った頃のように記憶しておりますが、母が縫物をするとき、子供の私たちには「針に糸を通す役目」みたいなものがありました。ある日、いつものように母の手伝いをしておりますと、母がその針を頭の上にかざして、「この小さい針が、大海原にズズッと突き出て、その極々小さい針の穴に糸がスーッと入ったのと同じくらい、この尊いご信心との出会いは滅多にない貴重なものよ。大切にしてください」と、ご信心のことがよく分からない私に教えてくれました。当時の日常生活の、ごく普通のヒトコマですが、今も私の記憶には強く焼き付いています。

子供にご信心を厳しく躰けた母も、また強いご信心を持っていた父も、今はそれぞれ他界しましたが、そんな両親の間で、生まれながらにこのご信心にお出会いしている私は、今もなお両親のご信心に対する後ろ姿を見ながら、今日まで過ごしてきたような気がします。

私の子供時代は、そんなに裕福な生活を送ったわけではありませんでした。しかし今思えば、両親は色々と工面をして、その頃にしてはずいぶん立派な御戒壇をお迎えいたしました。御宝前さまが鎮座された部屋は、ピンポン玉を置くとジワッと動いてしまうという、少し座の傾いた家でしたが、御戒壇をお迎えした頃、そんな傾いた部屋に先住日崇上人をお迎えし、お泊りいただいたこともありました。そのとき私は、両親の一途な思いを垣間見たような気がしたものです。

やがて私も成人して独立し、両親のご信心をお手本として、仕事に、ご奉公にと励ませていただくようになりました。と、申しましても、両親という壁はあまりに高く、なかなか及ぶものではありませんでしたが、そんな私も平成二年六月十四日、何とか御戒壇を購入し、念願の護持御本尊さまをお迎えさせていただくという大きな果報を得ました。私もいろんなことで両親には心配ばかりかけておりましたので、御戒壇が建立できた喜びのほかに、「これで少しは親孝行したという証を、両親に見せてあげられる」という嬉しさもありました。

両親は大変喜んでくれて、内子町から訪ねてくれました。足の悪い父を背負って、二階にお祀りしている御宝前の部屋まで上ったときの、背中に伝わる父の温もりを、今も忘れることができません。その父が亡くなったのは、偶然にも御戒壇をお迎えした翌年の、同じ六月十四日でした。ですから父の臨終は、御戒壇を建立した日の喜びを、一生忘れないものとしてくれました。

ところで御戒壇を建立し、護持御本尊さまをお迎えしてからの私は、次々と大きなお計らいをいただくことになりました。商売上、社会と競合していくためどうしても店舗の拡張が必要でしたが、間もなくその念願が叶ったのです。

平成六年には支店の隣地を買収して、増改築することができました。また平成十年には本店の隣地を購入することができ、鉄筋三階建ての新社屋をオープンすることもできました。世の中は長引く不況の時代に入っていましたが、私どもの会社がこうして順調に業績を伸ばせたのは、御宝前さまよりいただいた御利益にほかなりません。今はもう、我が家の御法さまに、そして両親に、随喜の思いでいっぱいでございます。

両親が教えてくれたご信心に対する姿、そして今でも何故だか私の頭の中に残っている母の言葉、「大海より突き出た針の穴に、糸がスーッと入った」というこのご信心との出会いを大切に、他の人にも

この貴い妙法をお勧めしていきたいと強く感じております。

ありがとうございました。

(平成十七年五月一日発表)

義母に学んだご信者さんらしさ

第三連合第二勸信組 石村弘子

ありがとうございます。

今日は手前味噌ではありますが、本門佛立宗の教えのお陰で幸せに暮らせた、我が家のお話をさせていただきます。

もう五十年近い昔のことです。私たちが結婚したての頃は夫婦共稼ぎで、義母一人を家に残して別居をしておりました。土曜、日曜と実家に帰り、あたふたと日ごろ行き届かない家事をする生活で、その頃は義母が御宝前に座ってお看経している姿を、何げなく見ていたものです。

子供の出生を機に同居を始めましたが、やはり私は勤めに出ていました。義母は長男や長女の世話を良くしてくれました。ひところは授乳のためにバスに乗り、子供を背負って坂道を登り下りしながら職場まで来てくれました。生後四か月頃からは義母が離乳食を作り、食べさせてくれました。私が忙しさにかまけて早々に離乳に踏み切ったので、子育ては義母に任せっきりとなりましたが、義母は愚痴一つこぼさず家事の一切と孫の世話をし、私に代わる主婦を勤めてくれたのです。そんな子育てと家事で多忙な義母でしたが、寸暇を惜しんでお看経を上げておりました。しかし信心気のない若い私は、義母のそんな姿を理解することができませんでした。

やがて夫が転勤することになり、私は二人の子供の教育のために退職の道を選びました。それからはベテラン主婦の義母と、新米主婦の私との共同生活が、一つ屋根の下で始まるのですが、嫁姑の同居です。ここで多くの方は、嫁姑の大戦争を想像されるでしょう。しかしそれ以来、義母の亡くなるまでの四十有余年、義母と私は口論一つせず、仲良く暮らすことができたのです。思うにそれは、どこまでも一人の信者に徹していた、義母の姿勢によるものでした。

私の信条は、「母親は家の中の太陽でいよう」というもので、それなりに努力をしました。義母は義母で、信仰に裏打ちされた「人に優しく」「人を大切に」「人を幸せに」ということがしっかり根の張った生活ぶりです。少しぎこちない嫁の私に口を添え、手を添えて助けてくれました。本当に頭が下がる思いでした。そこで私も、義母の助言を「わかりました」「ありがとう」「よく知っていますね」「それがいいですね」と返事をして、自然と敬意を表すことができました。すると愚痴も反発も起こりません。自然と二人の信頼関係が結ばれていきました。そのうちに、義母は我が子にも話せない昔のことなども、私には話してくれるようになりました。私と夫の諍いがあるときも、必ず義母は私の味方をして助けてくれました。

そんなご信心一徹の義母でしたが、私に対して信仰を無理強いすることは一切有りませんでした。た

だ、主人の交通事故のときや、孫たちの入学、卒業、就職などの節目節目には、一生懸命にご祈願の口唱をしていました。その姿を見ながら、私はいつしか「義母の信仰を受け継がなくてはならない」と思うようになったのです。

齢六十にしてやっと入信の決意をしました。いまだにご信心のこと、お寺のこと、ご信者同志のお付き合いのことなど、分からないことはいろいろありますが、今は義母の大らかな姿が、御法さまのお導きを受けた人の幸せな姿であったのだと確信して、義母を目標に励んでいます。ですから嫁姑が仲よく暮らせたのも、御法さまのお導きがあればこそと思える今日この頃です。

義母の亡くなる年の四月、立教開宗七百五十年の本山参詣がありました。義母の枕元で「明日、本山にお参りに行ってきます」と話すと、大きく目を見開いてにっこりし、「行ってきて」と喜んでくれました。私がどうやらご信心に身を入れるようになったのが、とてもとても嬉しいようでした。

その頃から夫も、毎朝一緒にお看経を上げるようになりました。あまり健康でない私のために、夫はいくら忙しくてもお寺の送り迎えを黙ってしてくれます。私も最近では少し元気が出て、県内他寺院の御会式参詣もさせていただけるようになりました。加齢と共に、身体のあちこちに故障が出てきましたが、ご信者さんの暖かいお力添えと励ましもあり、今日もどうやら一日元気で過ごせたことを、御法さまと義母と夫に感謝して、口唱をさせていただいております。そして本当に良い人生であったと思える晩年を送っております。

私は義母に、「ご信心で学んだことを家庭内で実行する大事さ」を学びました。今、私は、夫婦・親子・兄弟に限らず、ご信者同志の集いの中で、愚痴や悪口、不平、不満を捨てて風通しを良くし、み仏のお智慧をいただき、人を敬い、人の幸せのために優しい心の持てるご信者の輪を広げたいと願っております。

ありがとうございました。

(平成十七年五月八日発表)

朝参詣の功德

第四連合第三長寿組 森山一男

ありがとうございます。

私は朝参詣が大好きです。今年で八十六歳になりますので、バイクで朝参詣をする私を心配する人もありますが、朝になるとお寺に行きたくてウズウズし、バイクに乗って出掛けます。

しかし、毎日のようにバイクに乗っておりますと、ときには「ヒヤッ」とすることもあります。それでも今日まで大きな事故をすることなく、無事にご奉公が続けられているのは、やはり朝参詣の功德で御法さまから護っていただいているのだと感謝をしております。今日はそんな朝参詣の中で、大難を小難にさせていただいた体験を二つご披露させていただきます。

一つ目は平成十二年の夏の頃、バイクで朝参詣の帰り道での出来事です。

南江戸町のスーパーの前で、私は右に曲がろうと指示機を出して、後方確認をするためにサイドミラーに目を向けました。そのとき、前を走っていた車が急停車をしたのです。距離は五メートルほどあったと思いますが、なにしろちょっと後方に気を取られていたものですから、ブレーキが遅れて前の車を避けることができず、後方のバンパーに追突してしまいました。その衝撃で、かぶっていたヘルメットは前方に飛ばされ、右足がバイクと前の車のバンパーに挟まれました。私は「しまった」と思いましたが、不思議に大した怪我もありませんでした。左手にちょっとしたかすり傷を受ただけで済ませていただいたのです。

あとで考えるに、もし変に判断する余裕があって、左に回って車を避けようとしていたら、後続の車に逆に追突されていたかも知れません。また右に回って車を避けていたら、前方からくる車に撥ねられていたかも知れません。咄嗟のことでブレーキのみに頼ったお陰で、足は挟まれましたが、左右にぶれることもなく転倒から免れたのだと気づき、御法さまにお護りいただいたことを実感したのでした。

しばらくして白バイのお巡りさんが来ましたが、大した怪我もしていないので「双方の話合いで済ませなさい」と言って帰っていきました。後でバイクの修理代が少々かかりましたが、大難を小難にさせていただいたと喜ばせていただきました。

二つ目は平成十四年の夏、やはり朝参詣の帰り道でのことです。

一万町を走行中に、脇道から突然乗用車が出てきたのです。直進する私のバイクの進路をふさぐように出てきたものですから、避けきれずに乗用車の後部に追突してしまい、私はその拍子に転倒しました。ところがこの度も左手の甲にすり傷ができ、バイクのブレーキレバーが折れただけで済んだのです。不思議でした。おまけに対向車もなく、また後続の車やバイクもなかったもので、転倒はしましたが大事にいたることはありませんでした。原因も、相手が脇道から一旦停止せずに出てきたのが悪かったようで、先方の謝罪で一件落着きました。この日も大難を小難に変えていただいたと心から感謝し、家に帰らせていただいたのです。

こうして度々御法さまにお護りをいただいている私ですが、そんなことが続きましたので、最近では自転車での朝参詣が多くなりました。四キロほどの道のりですので、まだまだ若者のつもりで頑張っております。皆さんも朝参詣にお励みください。いざというときに、朝参詣の功德が必ず私たちを護ってくださいます。

ありがとうございました。

(平成十七年五月十五日発表)

義母の後姿を追いかけて

第五連合第二本清組 奥村照子

ありがとうございます。

私はまだまだご信心が浅く、『びっくりす』の体験談を読ませていただいて、「皆様のような素晴ら

しい御利益をいただくご奉公は出来てないなあ」と思っておりましたら、「信行体験談を発表してください」と言われて困りました。

しかし今、私たち夫婦や子供たち、孫たちが無事に毎日を過ごせるのも、義母のご信心のお陰と思い、今日は義母のお話をさせていただきます。

早いもので、義母・奥村冬子が亡くなって今年が二十三回忌です。お婆ちゃんの元気だった当時はいつも着物を着て、お寺参詣や御講参詣に行っていた姿が今も目に浮かびます。ご信心のことはよく分からなかった私も、きちんと身なりを整えるお婆ちゃんの様子を見て、「大事な場所に行くんだな」と感じたものでした。

お婆ちゃんは常々私に、ご信心の話聞かせてくれました。

「私は色々苦勞もしたけど、このご信心をさせていただくようになって、それはそれはたくさんの御利益をいただいたのよ」と、自分のいただいた御利益を話してくれることもありました。

「今は毎日、朝夕、あなたたちのことを思って、罪障消滅が出来ますようにとお願いしているの。普段何事もないときは気が付かないけれど、何事もないのが幸せなの。この幸せのときを喜ばなくてはいけませんよ。御宝前さまに守っていただいているのだから」と、毎日の平穩無事を御法さまに感謝することも教えてくれました。

「御宝前さまは私たちの唱える御題目がお食事です。百遍より千遍、千遍より万遍、御題目さまはたくさんお唱えするほどいいの。大難を小難に変えていただける、有難いご信心ですよ」と、お看經の大事なことも話してくれました。最初は意味も分からずに聞いておりましたことも、繰り返し聞かされる中で頭の中に残るようになり、それがフトしたきっかけで思い当たる出来事に出会って、「お婆ちゃんはこのことを教えてくれていたんだなあ」と知らされることもたびたびでした。

私たちの年齢だと、世間一般では昔はよく「嫁姑の問題」が取り沙汰されました。しかしお婆ちゃんは、不思議とまだ若かった未熟な嫁の、私の悪口を一言も言いませんでした。そんな影響もあって、私も里帰りしたときやご近所の方と話すとき、お婆ちゃんの悪口を一切言うことがありませんでした。ある日の御講席で、「人の悪口を言えば罪障になる」ということを御法門で聴聞させていただきました。そのとき、「お婆ちゃんは素直に御法の教えを守っていたんだなあ」「御法さまを疑わない、お手本になる立派なご信者だったのだなあ」とつくづく感心させられたものです。今思えばお婆ちゃんの生活は、ご信心で教わることを真面目に実行する毎日でした。そんな後姿を見て、私はいつしかご信者になれたのだと思います。

今や私たち夫婦も「老人」と言われる年齢になり、少しずつ身体に不調を感じるようになりましたが、この上は御宝前さまにおすがりをして、子供たちや孫たちの手本となる信者になろうと思っております。ありがとうございました。

(平成十七年五月二十二日発表)

「まずお看經」の大事を学んだ体験

ありがとうございます。

もう二十年も前になるでしょうか。以前ご近所に住んでいた橘末代さんといっしょに、御宝前さまからお叱りをいただいた思い出を、今日のご披露させていただきます。

当時の私は長い間、調理師の仕事をしていました。あの頃は景気も良く、忙しい時期は休みなしで働き続けることも珍しくはありませんでした。

そんなある日のこと、長い間続いた仕事が一段落して、二日間のお休みをいただきました。久々のお休みでしたので、私は早起きして掃除・洗濯と家事をし、やがて主人も勤めに出かけ、やっと自分の時間を迎えました。私は「やれやれ、これからは自分のことをしよう。お看経をしようか。それとも新聞を読もうか」と考えましたが、「いや、お看経はあとでもできるな。最近新聞をゆっくり読む時間もなかったので、今日は先に新聞を読んで一息いれよう」と思い、新聞を座敷の真ん中に広げたのです。

そのとき、玄関の戸がガタガタ、ドスンと音を立てました。私は誰かが玄関の戸に当たったのだと思い、大急ぎで玄関に行きました。すると二軒隣りのご信者・橘末代さんが玄関の内側の障子戸の敷居を持ち、身体は土間に、足は玄関の外に出したまま、顔面蒼白で倒れているではありませんか。私は気が動転し、「どうしよう」と思いました。ちょうどそこへ近所の奥さんが通りがかりましたので、訳を言って手伝ってもらい、ブルブル震えながら橘さんを畳の上に上げて、とりあえず横に寝かせたのです。

橘さんは片手に持っていたお数珠を差出し、「背中をさすって欲しい」と合図しました。声も出ない様子でした。私はお数珠を受け取り、御題目をお唱えしながら必死でさすりました。十五分ほどすると少し落ち着いたのか、「もういい」と合図をするので、「ここではいかん。御宝前さまの前に行こう」と言いましたが、まだ橘さんは立つことが出来ません。そこで身体を引っ張るようにして、なんとか座敷の御宝前さまの前に連れていき、お線香一本のお看経をさせていただきました。

初めはグッタリとしていた橘さんでしたが、お看経の終わる頃には背筋を伸ばし、声を出してお看経しているので大変驚きました。なぜなら、御題目をお唱えしている間、私の頭の中は「私の家で死なれては困るなあ」と考えていたほど、橘さんの様子は普通ではなかったのです。ですから、お看経している橘さんを見て、「ああ、助かったんだ」と心から安堵しました。

お看経が終わり、二人でお茶を飲みながら事情を聞くと、橘さんも朝の掃除を済ませ、ご主人が病院に行って一人になったので、お看経をしようか、家のことをしようかと考えた末、お看経を後回しにしてしまったようでした。家の外の用事をするために押し入れの狭いところに入り、棚のものを取ろうと手を上げたところ、クラクラと目眩がしてその場に座り込んでしまったと言うのです。私は、自分がお看経を後回しにしたのを見られていたような気がしてヒヤッとしました。

やがて息が苦しくなった橘さんは、御宝前さまにお願いしようとそこから這い出して、お数珠を手にしたそうです。しかし、あまりに苦しいので誰かに助けてもらおうと外に出て、必死の思いで歩きはじめました。近所は普段、私も含めてみんな仕事に出て留守ですから、少し離れた西原さんの家まで行けば何とかかなと思ったそうです。フラフラしながら隣の家の壁を伝え歩きに歩くうちに、留守だと思った私の家の玄関の戸が、つかまったはずみで開きました。そしてそのまま倒れ込んでしまい、後のことは分からないということでした。そこで私が今までのことを話すと、「私、御法さまに助けてください

たんやなあ」と一人で感心しておりました。

少し落ち着いてから、私がお家まで送っていくと、なんとまあ玄関の戸は開けっ放しで、中の障子も開いたままでした。履物を並べ直しながら「私は裸足で飛び出したんやなあ」と橘さんが他人事のように言って、ズボンの脛の上に付いた泥を払う姿が可笑しかったのを覚えています。

私は家に帰り、つくづく考えました。これは御宝前さまから私と橘さんへのお折伏だと。そしてすぐにお詫びのお看経をさせていただき、あらためて御利益をいただいたことを実感したのです。

それからの私は、何事も御宝前さまのことを先に先にさせていただくように改良させていただき、口唱に励んでおります。

ありがとうございました。

(平成十七年五月二十九日発表)

日崇上人をお偲びして

第七連合第二事行組 堀口久義

ありがとうございます。

私が先住日崇上人とお出会いさせていただいたのは、昭和二十四年のことでした。

戦後、やっとの思いで復員を果たし、なんとか丸善石油の子会社・松山製作所に入社しますと、その会社の上司がご信者の門屋一徳さんで、この御法との縁を結んでくださったのです。

当時、私の父はアルコール中毒で、母・モトエも父の身体を心配して、いろいろと手を尽くしておりました。良いと聞けば何でもし、頭にお灸を据えて頭痛を抑えたりもしていましたが、効果の方はさっぱりなく、母は身も心も疲れておりました。そんな我が家の事情を知った門屋さんから、ご信心を勧められたのです。

私は早速両親に話して入信を決め、御本尊さまを奉安させていただきました。初めて日崇上人をお迎えさせていただいた日の喜びと緊張は、今も懐かしい思い出です。その日、電車で山西駅まで来られた日崇上人を、私は自転車でお迎えに出たのですが、戦後のことで、粗末な自転車の後ろに乗っていただくのがもったいなく、申し訳なさで胸が一杯になったのを覚えています。

日崇上人は両親と私に、この本門の妙法はとても功德が大きいので、毎日一生懸命にお唱えすること。家族の絆は過去世の因縁でとても深いので、助け合って仲良く暮らすことなど、濃やかな言葉をかけられました。そして直々に教えを受けた両親は、その日から御題目さまにお籠りさせていただくようになったのです。しかし御題目さまにお会いしたのも束の間、父は五十三歳で亡くなりました。日崇上人にお目にかかって、五ヶ月後のことでした。それでも人生の最後にこの御題目さまにお出会いし、日崇上人に親しくご教導いただいた父は、本当に幸せだったと思います。

私は岐阜の出身でしたので、こちらに親戚や友人はいませんでした。ですから頼りの父を亡くして松山に留まるのが不安で、大変辛い思いをしましたが、日崇上人からは「無理も謗法だから、少し落ち

着いてからご奉公に来なさい」とやさしくお気遣いをいただきました。また当時の第二妙唱組の皆さん、石丸さん、浦屋さん、桧さん、鎌田さんたちにも励まされ、共にご奉公させていただく中に少しずつお陰をいただいて、ご信心の有難さを学んでいきました。そして昭和三十六年には、今の第三妙唱組の組長・藤本洋子さんのお父様の藤本好春さんに御戒壇を作っていただき、護持御本尊さまをお迎えすることができました。

この頃になると、母はとても嬉しそうに御講をお受けするようになり、いつも早くから準備をしておりました。当時は玄関に目印の提灯を灯してご信者さんをお迎えし、私は単車で山西駅まで日崇上人をお迎えに参りました。あのおんぼろの自転車から、こうして単車でお迎えができるようになったことが有難く、何より私の背中に感じる日崇上人の鼓動に心が弾んだ喜びを、今も忘れることはできません。もちろん日崇上人にも大変喜んでいただきました。子供たちも日崇上人がお見えになると、ご供養のお菓子がもらえるからでしょうか、御講を楽しみにしておりました。まだ世の中は貧しい時代でしたが、一席の御講は、そうした歓喜の輪の中で勤められておりました。

ちょうどその頃、私は十二指腸潰瘍を患いました。大変苦しみましたが、母と妻の一生懸命のご祈願と組内の皆さんの熱烈なお助行、そしてお供水さんとで信じられないお計いをいただき、手術をせずに快復させていただきました。以来、大病することなく、八十五歳の今日まで元気に過ごしております。

母は日崇上人の教えを守り、ご信心の喜びを人様によくお話しし、教化子もたくさんおりました。そんな母が天寿を全うしたのは昭和四十二年のことでした。私たち夫婦は、母のように人にご信心を勧めることができずにおりましたが、大洲大法寺におられた今の御導師のお口添えで、長男をなんとか入信させることが出来ました。このときも日崇上人が大変喜ばれ、「お母さんが寂光で喜んでいる。これからは貴方がお教化に励みなさい」と教えられました。

昭和五十一年、私に大きな転機が訪れました。私の家族は、長男以外は丸善石油に勤めていましたので、「丸善ファミリー」となどと言われていましたが、ファミリーの一員だった私の妻が突然吐血し、救急車で運ばれて、翌日アツという間に亡くなったのです。肝硬変でした。妻の父親の容体が悪く、付添いに行って帰って間もなくのことでした。妻の後を追うように妻の父が亡くなり、神戸で葬儀に参列しておりましたら、今度は次男の第一子が死産という知らせを受けました。慌てて松山に帰ってお葬式を出したのですが、そんな不幸続きの中、次男の嫁のご両親から今の妻を紹介され、私は再婚することになりました。この頃の日崇上人は現役を引退され、ご静養中でしたが、ご報告に何うと自分のことのように喜ばれ、ご信心を中心に頑張りなさいと励ましてくださいました。お陰でその妻もご信心のことをよく理解をしてくれ、我が家を支えて頑張ってくれています。なにより明るい人柄で、大変助かっています。

今年の初御講で、御導師さまが頭を剃っておられるのを拝見し、妻は「これはただ事ではない」と感じたようで、山本早苗さんの協力を得て朝参詣を始めました。朝参詣をさせていただこうと考えて、念のため「この年になって始めて大丈夫でしょうか」と御導師の奥さまに申し上げたら、背中をポンと叩いていただき、「これから、これから」と励まされたようで、大変喜んで朝参詣を続けております。そんな妻を見ている私までが、幸せな気持ちになれるこの頃です。

これまでも他寺院のご参詣や、御講参詣などは努めてご奉公させていただき、毎年二～三席の御講を

頂戴してまいりました。また、どなたのお席でも御導師さまや御講師さまのお迎え、お見送りをさせていただいてまいりました。皆、日崇上人に教えていただいたことです。お陰様で私の子供たちは、皆それぞれに果報をいただき、親に心配をかけずにやってくれております。

これからも命の続く限り、日崇上人から教えられたことを守り、素直な初心に立ち返って、一人一人の長所がよく見える「優しい自分らしい自分」でいられるように、御法さま中心の毎日を送りたいと思います。そのためにも御題目口唱に、ご参詣に励ませていただき、子供や孫や曾孫の代までも、この御法さまに護っていただけますよう法灯相続に努めたいと思います。

ありがとうございました。

(平成十七年六月五日発表)

祖母の臨終を目標に

第九連合第二妙唱組 黒星藤子

ありがとうございます。

私が本門佛立宗のご信心に出会ったのは、祖母・黒星イワの臨終がきっかけでした。

祖母は久保田ワキエさんという熱心なご信者さんの教化を受け、病弱な息子のご祈願のために入信しました。素直に御法を信じ、真面目にご信心に励む祖母と一緒に暮らしていた私ですが、今から思えば勿体無くも、当時の私はご信心にはまったく関心がありませんでした。

祖母が九十三歳で、一度も入院することなく眠ったままの大往生をしても、私はご信心を相続する気持ちになりませんでした。ですから仕方なく、元局長の岩永佐多夫さんが御本尊さまを捲収に来られても、されるがままに見ておりました。

ところがそのとき、娘のみはるが「お婆ちゃんが、私が死んだらこのご信心をするようにって言ったろ」と言ったのです。娘は行儀作法に厳しかった祖母と普段はとても仲が悪く、それが原因で少しの間は別居をしておりましたが、結局その娘のひと言で、新たに岩永さんの奥さんにご奉公をいただいて、我が家に御本尊さまを奉安させていただくことになったのです。

以来、三十五年以上が経過します。改めて振り返ると、お陰さまで私自身はお金に苦労したことが一度もありません。目に見えない御利益を、日々に頂戴していたのだと思います。もっとも「ご信心をしていた」とは言っても、若い頃は仕事をしておりましたので、長い間、夜の御講にご参詣させていただく程度しかご奉公はできておりませんでした。

そんな私に転機が訪れたのは、平成六年に子宮癌を患ったときでした。病気が見つかったとしても、二年ほど前から糖尿病の治療をしていた私は、すぐに手術ができませんでした。そこで血糖値を下げるための入院を余分に一月して、手術に備えることになりました。このとき、組内の皆さんが私のためにお助行をしてくださりました。ほんとうに有難かったです。手術のときも一色美代枝さんと国塚カホルさんが進んでお助行してくださり、お陰で早速御利益を感得させていただいたのです。

糖尿を患うと傷口が塞がらず、薬が効きにくいと言いますが、私の場合は塞がりにくい筈の傷口も炎症を起こすことなく、今でもまっすぐできれいな痕となって残っています。また手術後、一度も痛み止めの薬を投与することがありませんでした。まったく痛みを感じないので、お医者さんから「黒星さんは精がない。薬が効いているのやら効いていないのやら分からん」と言われたこともありました。抗ガン剤の投与を受けても、ムカムカしたり苦しむことはありませんでしたが、さすがに髪の毛が抜け始めて、やっと薬が効いていると分かったほどでした。そして私はこのとき、「御法さまに護っていただいている」とはっきり実感したのです。

この御利益を感得してから、私は今まで以上の思いでご奉公させていただけるようになりました。平成十三年六月十三日からは、自分自身の退職と孫のご祈願をきっかけに朝参詣も始めました。私は車に乗れませんから、高浜からの始発のバスを利用するのですが、思いが変われば御利益も様々な形で感得させていただけるようになり、心も軽くさせていただきました。

平成十五年十一月にも、不思議な御利益をいただきました。朝参詣から帰った私は、途端に吐き気がして、食事も喉を通らなくなったのです。二～三日様子を見ましたが快復しません。やがてトイレにも満足に行けなくなり、娘の勤めている市民病院に入院することになりました。いろいろ検査をしましたが、これという原因の分からぬまま十日が過ぎたころ、いつも入院するときにお供させていただく懐中御本尊さまを家の御宝前に忘れてきたことに気付き、娘に頼んでお供してもらいました。するとどうでしょう。今まで自分でトイレにも行けず、いちいち人様のお世話になることが辛くて辛くて「このまま死んでしまうのか」とまで思っていた症状が、途端に良くなったのです。足もフラフラすることなく、しっかり歩けます。さっきまでの症状が嘘のようでした。

私はこのときほど、御本尊さまが尊く、有難く思えたことはありませんでした。病気の原因は分からず仕舞でしたが、御法さまにお縋りする気持ちを一時も忘れてはいけないと教わったのだと感じました。

今、私の最後の願いは、子供や孫たちもこの御法さまに護られて、共々に寂光に参詣させていただくことです。

娘は主人の理解が得られず、いまだに個人御本尊でのご信心で、本当の有難さはよく分かっておりません。しかし平成十五年の夏に孫が交通事故を起こしたとき、娘が初めて「婆ちゃんが朝参りしとるお陰」と言ってくれたのです。この事故は、孫がセンターラインを越えて正面衝突をしたので、百パーセント孫の過失だったようです。ところが車は大破したのに双方に怪我はありませんでした。また就職も決まっていたので、行政処分を受ければ内定を取り消されても仕方のないところですが、示談で円満に解決し、無事に就職することもできました。重ね重ねの不思議さに、娘も何か感じてくれたように思います。

これまでの私は、人のお世話になるだけの信者でしたが、渡辺智恵子さんが組長になられた今期より、及ばずながら組の会計のご奉公をさせていただくようになりました。子供や孫をご信心に導けますよう精一杯ご奉公させていただき、また一人でも多くの方にこの素晴らしいご信心を知っていただけるようお教化に励ませていただいて、祖母の大往生にあやかりたいとお願いいたしております。

ありがとうございました。

信友

第八連合第一信要組 中西久子

ありがとうございます。

私がこのご信心にお出会いして、もう二十三年になります。当時の私は主人との間に問題を抱え、妊娠十ヶ月に入って団地に引っ越すという非常事態で、心身ともに疲れきっておりました。そんな私の様子を見かねて声をかけてくれたのが、同じ団地に住んでいた上田タカ子さんで、これが私の生涯の信友との出会いともなりました。

上田さんに言わせると、初めて私を見た印象は「なんて暗い顔をした人がいるのだろう」という驚きだけで、思わず声をかけてくれたんだそうです。そのとき、もし怪しげな宗教に誘われていたとしても、私はフラフラと付いて行ったと思います。それほど私は、憔悴していたのです。

上田さんに誘われるまま、松風寺の御会式にご参詣して、私は初めて御題目を唱えました。北条方面のご信者さん宅の御講にも付いていきました。翌昭和五十七年に生まれた子供は、このご信心に縁があるのか、お看経のときはいつも起きて、おとなしくお参りをしてくれました。そしてその子が二歳になったとき、ご参詣の帰りに車の中で、上田さんに入信を勧められ、私は本門佛立宗の信者となったのです。

一人の信者としてご参詣を重ねる中で、私の身体は徐々に元気を取り戻し、やがて仕事ができるまでになりました。数年前の私を知る人には、とても考えられない体調の変化に、御法さまから頂戴した御利益と感謝させていただきました。もちろんその陰には、たびたび我が家を覗いては声をかけ、励まし、ご信心の大事なことを教えてくれた上田さんの姿がありました。ですから私の子供は、母親以上に上田さんに懐き、成人した今も「バーバ」「バーバ」と呼んで親しんでいます。上田さんとの出会いが、私たち家族の人生を変えたのです。

私は少しでもご恩返しをさせていただこうと、子供が小学生になると薫化会のお手伝いをさせていただくようになり、お役も受けてご奉公を学びました。そんな中で御戒壇を建立するように勧められ、月賦で小さな御戒壇を求めて、御弘通御本尊さまをお迎えさせていただきました。我が家でお看経をし、御講を受けられる喜びはなにものにも替え難く、日々御法さまに護られていることを実感しながら、数年が過ぎていきました。

八年前、私は大きな御利益をいただきました。会社のガン検診で二回引っかかり、そのままにしていたのですが、ある日の婦人会御講のあとで急に腹痛がして国立病院で診ていただくことになるのです。急な外来で入院できないところを入院させていただけたのもお計らいでした。検査の結果は擬陽性で、お腹を開けてみないとガンかどうか分からないということでしたが、手術をするとガンの一歩手前で、早期発見の御利益をいただくことになりました。御講のあとで病院に行くことになったのも、「今すぐ

行きなさい」と御法さまに教えていただいたのだと思います。お陰で大事に至らず、有難く感謝をさせていただきます。

ただ、その後の私はガンの心配はなくなりましたが、いろいろな病気と闘うこととなります。中でも心臓の冠状動脈の一本が完全に詰まって心筋梗塞になり、ニトロを持ち歩かなければならなくなって、家に居る時間が増えました。するとまた、新たな御利益をいただくことになるのです。

と言うのは、家にいる時間が増えたため、朝晩ジックリと御宝前に向わせていただく中で、私はお莊嚴を考えるようになったのです。「御宝前の向きはどうしよう」「お花をきれいに飾るには台が欲しいな」……。信者としては当たり前のことかも知れませんが、働いていた頃の私は、一度もそんなことを考えませんでした。そんな私に組長の久米さんが、「護持御本尊さまをお受けしなさい」と教えてくれたのです。

早速、御導師さまにお願いして護持御本尊さまをお認めいただき、五月二十五日の御修行で御開眼の言上をいただいて、今月一日に無事ご奉安をいただくことができました。護持御本尊さまをお迎えした御宝前は、一段と輝きを増したようで、お看経もよくあがります。これも病気のお陰と感謝させていただいております。

不孝のどん底から今日まで導いてくださった御法さま、御導師さま、お教務方、ご信者の皆さん、そして何より上田さんに、今は感謝の気持ちでいっぱいです。今後はしっかりと口唱に励み、早く身体を元気にしていただいて、開講百五十年の記念のご奉公を皆さんと一緒にさせていただきますよう頑張りたいと思います。

ありがとうございました。

(平成十七年六月十九日発表)

ご信心に目覚めた体験

第十連合第二大歓組 音田和久

ありがとうございます。

私が突然の病気をきっかけに、ご信心の大切さを気付かせていただいた御利益をご披露させていただきます。

私が御題目のご信心にお出会ったのは今から三十二年前、結婚を期に個人教化となり、入信させていただいたことに始まります。家内の母、吉住利子は大変熱心なご信者で、時間があればいつも御題目をお唱えしておりました。ご信心の大切な話もたびたび聞き、御法の有難さも何となく理解しておりましたが、私はどちらかというといつも仕事に追われ、ずっと懈怠気味でした。

そんな五年前のことです。二十八年間勤めた会社を希望退職して、私は家の近くの会社に再就職しました。今までは通勤に片道五十分ほどかかり、家に帰るのが常に十一時、十二時を過ぎる毎日でしたので、少しは楽になると喜んでおりました。

そんなある日、お休みの前日に友人と一緒に大洲の店で飲食をしておりますと、今までに経験したことのない身体のだるさと肩の張りに襲われ、そのうちに胸の鼓動が高まり、冷や汗が出てきました。私は「これは普通ではない」と思い、自分で救急車を呼んで大洲中央病院に行きました。病院に運ばれる途中、家の住所や身体の具合等を聞かれ、着くとすぐにCT検査をしていただいて、その日は降圧剤の点滴を一晩中受けました。

そうこうしているうちに家内と親兄弟が駆け付けてくれました。医師から説明を受けた家内たちは、「最悪の事態も考えておくように」と言われていたようです。一方、我が家では、義母と子供たちが一生懸命に御題目をお唱えして、私の無事をご祈願してくれていたそうです。もちろんそのときの私は、自分がそんな重篤な事態にあったとは知りませんでした。後で聞かされて、いざと言うときにご信心を中心に結束する家族の有難さを痛感しました。

さて翌朝、大洲中央病院では治療できないということで、私は愛媛県立中央病院に救急車で搬送され、救命救急センターのICUに入院しました。病名は解離性大動脈瘤で、検査の結果を見て手術をするか、自然治療かのどちらかに決まるとのことでした。それを聞いた私は、「どうか手術だけは避けることができますように」と、自分でも不思議なくらい必死で、御法さまにお縋りをしました。

私の祈りを聞き届けてくださったのか、私は手術をせずに治療を進めることになりました。御法さまに対して、心から感謝をさせていただきました。ですから入院中は、懐中御本尊さまとお数珠を身に付け、時間があれば御題目をお唱えしておりました。そのときフト、いつの間にか困ったときには、三十二年間のご信心のお陰で自然と御題目をお唱えするようになっている自分に気が付いたのです。恥ずかしい話ですが、これでは困った時の神頼みです。私はこのとき、信心を改良して、普段からご奉公がさせていただけるように努力しなければならないと思ったのです。

CT検査の結果、今では病気もほぼ完治しており、三ヶ月に一回の通院で済んでいます。今後は少しでも義母の信仰を継げるような信者になりたいと思っております。

ありがとうございました。

(平成十七年六月二十六日発表)

御題目口唱の不思議

第一連合第二妙泉組 藤本スヅ子

ありがとうございます。

私は日ごろ、大事な書類をしまいすぎて苦勞します。ひどいときはいくら探しても見付からず、半日も探して疲れることもあります。あるとき、探し疲れて、ふと「御宝前さまにお願いしてみよう」と思い、二十分ほど御題目をお唱えしていると、不思議なことに何度探しても見付からなかった場所から出てきたことがありました。私は、「ああ、見付かってよかった」と嬉しく思うとともに、御題目さまの有難さを深く感じました。それ以来、私は探し物が見付からないと、まずお看経をさせていただき、見

付ければお礼の御題目を上げさせていただくようになりました。

つい先日も、こんな出来事がありました。孫が「坊ちゃんスタジアム」でテニスの試合があって、我が家に泊まった翌朝のことです。孫の自転車の鍵がなくなり、試合に遅れると大騒ぎしているので、私も一緒に探しましたが見付かりません。そこで御宝前に座って心からお願いしたところ、たちまち思わぬところから見付かりました。私が「鍵があったよ」と声をかけると、孫は大変喜びました。そこで「お婆ちゃんは、何か見付からないときはいつも御宝前さまにお願いするの。すると不思議なことに出てくるのよ」と言うと、孫は不思議そうな顔をして聞いていましたが、なにか得心したのか、やがてニッコリ笑って出掛けていきました。私もホッとして見送り、改めてお礼のお看経をさせていただきました。

話は変わりますが、私は朝夕お線香一本の御題目をお唱えすることを日課としています。ある朝、「今日はまず銀行に行き、それから他の用事もあるので……」と頭の中で考えながら、気が急いできたのでお線香を二センチほど残してお看経を切り上げ、急いで出掛けたことがありました。ところが銀行では、ATMの機械が故障して、二センチ拜むくらいの時間を待たされることになったのです。私は御宝前さまから、「どんなに急いでいても、しっかりと最後までお看経しなさい」とお叱りをいただいたのだと反省いたしました。そしてそれからは、どんなことがあってもお線香一本分は、最後までしっかりお看経させていただくようになりました。

「御宝前さまはいつも私たちをご照覧になっておられる」と御法門で聴聞させていただきますが、最近はずいぶん私のことをいつも見ておられるように思われ、少し緊張した日々を送っています。これから年を取っていく私には、このお叱りも良いお薬だったのかも知れませんが、改めて有難く感じ、また「不思議なご信心だな」と思っております。

常に御法さまのお護りのあることに感謝をさせていただいて、至らない私を良い方向へと導いてくださることを信じ、ご奉公に励ませていただきます。

ありがとうございました。

(平成十七年七月三日発表)

尿道結石の激痛から免れさせていただいて

第二連合第二堅信組 松窪秀雄

ありがとうございます。

平成十一年のことです。夜中の十二時頃に急に腹痛が起きました。普通の痛みと思えず、私は救急車を呼んで日赤病院に行きました。ところが腹部の写真には、特に異状は見当りませんでした。当直の医師は、「今後痛みがあれば、掛かり付けの病院に行くように」と言われました。

午前四時頃に家に帰りましたが、八時頃に再び痛みが起きましたので、掛かり付けの病院で診ていただきました。腹部のX線写真を撮ってもらいましたが、やはり原因は不明でした。痛み止めのお薬をいただき、服用しましたが、翌日も痛みが始まったので、掛かり付けの病院で再検査をしていただきまし

た。すると今度は、尿道に小さな石のようなものがあることが分かりました。早速、泌尿器科に写真を提出し、確認をしてもらったところ、痛みの原因は尿道結石と診断されました。

更に診察いただいた結果、排尿の異常や、膀胱・腎臓等の機能にも異状があり、石が尿道の少し広いところに止まっているので激痛に至らなかったと説明を受けたのです。私はその話を聞かされて、御法さまのお陰と感動いたしました。なかなか原因が分からなかったのも、私の痛みは、話に聞くほどの尿道結石の激痛ではなかったからです。日頃のご信心の功德をいただいたのだと、私は感得させていただきました。

原因が分かったので、私は写真数枚と紹介状をいただいて、専門の医師がいる病院で診察を受けることになりました。そして粉碎用シーメンス機で治療することになりましたが、その結果の粉碎効果は不明でした。しかし三日目の検診ではモニターテレビに石は映りませんでした。担当の医師は「細かくなって流れ出たのでしょうか」と言われました。次は尿道の拡張と、膀胱の肥大した部分を手術するため、心臓や肺等の機能検査をしました。問題はなく、約一週間、通院しながら手術に備えました。医師は「誰か付添いのものを」と再三言ってくださいましたが、私は「大丈夫です」と答えました。毎日我が家で「無事手術終了」のご祈願をさせていただいておりますので、私には何の不安もありませんでした。

当日は私も含めて、三人の手術がありました。そして手術後も、三人は同じ部屋で休むことになりました。翌日の回診のときのことで、医師から意外とも思える言葉をもらいました。私だけ、いつ退院しても良いというのです。「なんで一人だけ、そんなに退院が早いのか」と、他の二人も驚きの声をあげていました。私は心の中で、ご信心の功德をいただくことの違いに驚き、改めて御法さまに感謝させていただきました。

今も私は、この有難いお計いを忘れることなく、ご奉公させていただいております。

ありがとうございました。

(平成十七年七月十日発表)

いつもご信心を優先に

第三連合第一勸信組 水口新蔵

ありがとうございます。

自分考えでご信心を後回しにして、御宝前さまにお叱りを頂戴した体験を発表させていただきます。

私はこの何十年と朝参詣を欠かしたことがありません。朝起きると、まずは松風寺の御宝前さまにご挨拶を申し上げ、それから一日が始まるという生活を続けております。お陰様で御法のご加護をいただき、大病をすることもなく、元気に毎日働かせていただいております。

更には平成九年より事務局長のお役を頂戴し、微力ながらも御導師さまのお役に立つご奉公をと励ませていただいております。これも日々の朝参詣の御利益で、大過なく勤めさせていただいております。

ところが仕事が立て込んでまいりますと、御宝前さまのお力があればこそ、ご奉公も仕事も支障無く

勤めていられることを、ふっと忘れてしまうことがあります。そしてその度に、私は厳しいお叱りをいただいていたのです。

平成九年の夏のことです。私はいつも朝参詣から帰って、食事を摂ってから仕事に向かいます。現場が市内であれば何とか八時に着くことが出来ますが、他の市町村となるとそうもいきません。しかし私は、「水口さんはお寺があるから」と皆さんに納得していただいて、今まで無理を通してきました。

その日も長浜町の西の、松山からだと五十分程のところにある現場に向かっておりました。少し早目に打合せをするということでしたので、普段なら「お寺にお参詣してから行く」と断って、時間の融通をつけてもらうのですが、その日に限って「いつも迷惑を掛けているから、今回は自分が早目に出よう」と考えたのです。そこで勿体無くも御法門を聴聞せずに、私はお寺を出発させていただきました。

思惑通り、朝のラッシュにはかかりませんでした。そして「これなら少し早く到着する」と思いながら気分よく運転し、国道の制限速度が五十キロから四十キロに変わったことに気が付きませんでした。「あっ」と思ったときはもう遅く、警察のお世話になりました。スピード違反の切符を切られてしまったのです。

結局、それで時間を取られ、打合せには間に合いませんでした。何のために御法門前にお寺を出たのやら分からないことになってしまったのです。「これなら御法門を聴聞させていただいてから出発すればよかった」と後悔しきりでした。そして私は、自分の信心前の未熟さを痛感し、情けない思いをすると共に、御宝前さまに謹んでお懺悔申し上げた次第です。急いで出掛けなくても仕事は出来たのに、自分考えで大事な一席の御法門聴聞を軽く考えてしまい、仕事を理由に懈怠した心を、御宝前さまは厳しくお折伏くださったのです。

実は平成五年にも、仕事を優先したばかりにキツイお折伏をいただいたことがありました。

その年、本山の秋の御会式が第九支庁の当番参詣でしたので、私は早くから参詣の申し込みをしていました。ところが仕事の期日が迫り、どうしても間に合わないので、本山参詣をお断りして仕事に専念することにしました。忘れもしません十月七日のことでした。

その日は松山の地方祭で、職人を早く帰して私は現場に一人残り、残業をしていました。ところが三階建ての住宅の、ちょうど三階部分で仕事の段取りを考えていたときに足を踏み外し、私は一階まで転落してしまいました。長い時間が経って、正座をしている自分に気が付きました。何が起こったのか理解ができませんでした。そしてようやく、自分が上から落ちたのだと分かりました。

やっとの思いで義弟に連絡を取ることができ、私は家の近くの病院に入院することになりました。本来なら即死するか、障害を抱えて寝たきりになるかであったと医師から言われ、改めてその事故の大変さを知りました。

私は御宝前さまに護っていただいたことに感謝しましたが、同時にこれは、大きなお折伏を頂戴したのだとも感じました。というのも、大事な本山参詣をお断りしてまで仕事をしましたが、怪我のお陰で結局仕事は間に合わず、お客様にはご迷惑を掛けました。当然、本山御宝前へのご参詣の功德も積めなかったのです。

そのとき、自分考えでご奉公を後回しにするような信心前を改良する決意をしたにもかかわらず、四年後にまたお叱りを頂戴したのです。凡夫の浅はかな知恵には、つくづく情けなく思います。

本年四月の役中御講の御法門で、開導聖人当時の役中さんが、「仕事をして食べていてもいつかは死ぬ。食べなくても死ぬ。ならば仕事を言い訳にせず、ご信心第一にさせていただいて、臨終と同時に寂光参拝させていただく道を選ぶことが大事だ」とお折伏されたお話を聴聞し、その思いの深さに胸を打たれました。

今後は自己流の信心を改め、朝参詣にご奉公に励ませていただくことを御宝前さまにお誓い申し上げ、体験発表とさせていただきます。

ありがとうございました。

(平成十七年七月十七日発表)

得難い御法に巡り会えて

第四連合第二長寿組 福岡淑子

ありがとうございます。

私は入信してまだ一年半の新米の信徒です。このたび、このような機会をいただき、たいへん有難く、また恐縮いたしております。せっかくの機会ですから、日頃私自身が感じておりますこと、ご信心させていただける喜びをお伝えしたいと思えます。

私の両親は神仏に手を合わせ、ご先祖を大事にしておりましたので、私も自然とご先祖に対して敬いの心を持つことができていたように思います。ただし若いときは、「両親がしているのだから」という甘えから特に何をするでもなく、しかし不思議といろんなことが順調に経過をしておりました。そんな私が会社のことで、自分自身ではどうしようもない事態に陥り、深く悩むようになったのは一昨年暮れのことでした。今までが順調だっただけに、それは苦しい時間を過ごしておりました。

そんなある日、二十年来の同僚の武市良子さんが、「私が一生懸命ご祈願してあげるから大丈夫」と言って励ましてくれました。その一言が、私とこのご信心との出会いとなりました。以前から武市さんが、何か信仰を持っているということは聞き及んでおりましたが、そのときはご信心そのものよりも、そのように友人が気に掛けてくれたことを、私はとても嬉しく思いました。

しばらくして武市さんが、「一緒に朝お参りする？」とお寺参詣を勧めてくれました。聞けば朝六時からの参詣とのこと。私に勤まるかと思いましたが、そのときは藁にも縋る思いでしたので、「よし、頑張ってみよう」と決心し、平成十五年十二月二十三日より朝参詣を始めました。

年も変わり、平成十六年度の寒参詣を迎えましたが、私はそのまま皆参することが出来ました。毎朝お寺に参詣し、皆様と御題目を唱え、御法門を聴聞して一日がはじまる生活を、自然に受け入れることができたのです。ですから、「そろそろちゃんと手続きをして、入信をしたらどうか」との勧めにも素直に従い、二月十一日付けで松風寺の信徒として入信の言上をしていただくことが出来ました。そのときはまだ、私の悩みは解決していなかったのですが、主人の実家も私の実家も、宗旨は違いますが御題目をお唱えしていましたので、本門佛立宗が御題目をお唱えする宗旨であったことにもご縁を感じて、

入信を決意することが出来ました。

入信後、一人の信者としてお寺参詣をさせていただくようになってから、いろんなことが少しずつ良い方に向かい、一番の悩みの種も無事に解決することができました。それは本当に不思議としか言いようのない解決の仕方でした。「ご信心って素晴らしいなあ」とつくづく感じ、御法門でこのご信心にお出会いすることの難しさを聴聞させていただくたびに、ご縁をいただけた喜びに胸が震える思いでした。

それ以来、私は皆さんに支えられて、お参詣にご奉公にと何もわからぬままに励ませていただきました。間もなくお教化も成就しました。「お教化」ということ自体よく分からぬまま、悩みを抱えていた娘の友人の富山真衣さんにご信心の話をして、朝参詣にお誘いしたのです。富山さんはしばらく一緒に朝参詣を続けたある日、素直に入信に同意してくださり、計らずも私が教化親とならせていただきました。今は子育てをすることの大変さを学んでおります。

そのように無我夢中の信仰の中から、私自身はこれまで何度となく御宝前さまのお陰を感得して、本当に有難いご信心だと心から随喜できるようになりました。

たとえば、毎回というわけにはいかないのですが、仕事の合間に時間を割いて御講にお参詣させていただいております。すると御講参詣をした日は、自力で頑張るよりもかえって仕事の成績が良かったりするのです。お客様との待合わせの時間に遅れそうなときも、御講にお参りしたあとは不思議に信号がスムーズにいつて間に合ったり、提出する書類の不備からくるトラブルを事前に回避することができたりといったこともありました。それはもう、言葉で言い表せないほどのお陰を、毎日毎日、それこそ日常茶飯事のように感じる事ができるのです。

私の入信は、最近になって両親も歳を取り、「そろそろ私を中心となって、ご先祖の供養をしなければならぬかしら」と思っていた矢先にいただいたご縁でした。せっかく得難いご縁をいただいたのですから、主人にも、また子供たちにもこのご信心を勧めて、共に護っていただくことが出来るようになりたいと思っております。

昨年の秋の御会式に、長男の家族が七五三のお礼参詣にお寺にお参りをしてくれました。そのときの奉修御導師の福岡日雙上人が、「同じ福岡同士、ご縁がありますなあ」と直接お声を掛けてくださり、たいへん随喜いたしました。後でお聞きすると、御法門の最中、直接あんなふうにお声を掛けられることは滅多に無いそうで、あらためて喜ばせていただきました。そのとき、七五三のお礼言上をしていた孫の未来は、お供水を「おばあちゃんのお水のお薬」と言って、虫に刺されたときや、口内炎が出来たときにも欲しがり、その効き目の素晴らしさを身をもって感じてくれています。

徐々にではありますが、家族そろってご信心の出来る日を心待ちに、これからも一生懸命頑張っていきたいと思っております。これからもどうぞよろしく願いいたします。

ありがとうございました。

(平成十七年七月二十四日発表)

ありがとうございます。

今から三十五年ほど前の古いお話です。

今は亡き私の母は、村上アキと申しました。母が七十二歳の時のことです。家の中で何かの拍子に転んでしまい、そのまま起きられなくなったのです。すぐに救急車を呼んで病院に参りました。お陰さまで救急車が向かったのは、家の近くの浦屋病院でしたが、診断の結果は最悪で、母の背骨は、ちょうど卵の殻を手で握りつぶしたように粉々になっているとのことでした。このままでは寝たきりになり、やがて段々と弱って行って、一生自分の力で起きたり歩いたりすることができないという説明も受けました。突然の出来事に私は呆然としました。

そんな私たちの様子を娘の智恵が知り、「ばあちゃん、一緒にご信心をして御法さまにお縋りしよう。そして元気になるようお願いしようよ」と母にご信心を勧めてくれました。母は早速入信し、自宅に御本尊さまをお迎えさせていただきました。それからというもの、私は娘の智恵と二人で、寝ている母の枕元で毎日必死で御題目さまをお唱えさせていただきました。そして私の母も、そんな私たちについて御題目さまをお唱えしてくれるようになりました。

一週間ほど経ったでしょうか。ある日、母が少し身体を持ち上げて這っているのを目にしました。私は驚いて、「あら、ばあちゃん、起きたん？」と声を掛け、急いで手を添えました。すると母は、そろそろと壁に手をかけて、立ち上がろうとします。トイレに行こうとしていたのです。

その日から、母の状態は日ごとに良くなり、やがて一人で無事にトイレに行けるまでに快復をしました。寝たきりになると宣告されていた母が、立って歩けるようになるとは誰もが夢にも思っておりませんでしたので、一人で歩けたときの感激と喜びは、今も忘れることが出来ません。

早速病院に行って報告し、診察していただくと、病院の先生は「完全に治っています」と、とても不思議そうに言ってくださいました。

母はそれから本当に元気で、九十二歳の天寿を全うするまでお寺参詣にも頑張りました。御会式には最後まで、家族連れ立ってご参詣させていただくことが出来ました。御法さまのお陰をいただいて、残りの人生を何の心配もなく、毎日無事に、元気に過ごさせていただくことが出来たのです。私にとっては忘れることの出来ない、ほんとうに大きな御利益でした。

母にご信心を勧めた娘の智恵も、今は母親となりました。夫の転勤で転々と住む場所が変わりますが、行く先々のお寺で皆さんによくしていただき、また本人も頑張っているいろんなお役を頂戴しているようです。現在は東京の乗泉寺で、ブロック長としてご奉公させていただく果報を頂戴しております。

私もこの歳まで元気に過ごさせていただいた喜びを忘れずに、開講百五十年報恩ご奉公に一層励ませさせていただきます。

ありがとうございました。

(平成十七年七月三十一日発表)

お看経の不思議

第六連合第一本因組 岡 幸司

ありがとうございます。

私は子供の頃、家でのお看経はほとんどしたことがありませんでした。お看経をするといえば、父に連れられて参詣した寒参詣や夏期参詣、薫化会御講のときぐらいでした。父は毎日、お看経をしておりましたが、まだ子供だった私に「家でもお看経をきなさい」と言ったことは無かったと思います。

私が十二歳のときに、父が交通事故で亡くなりました。その知らせを聞いた私は、泣きながら御宝前に座り、お看経をしたのを覚えています。ですから父が亡くなった直後は、父の供養をさせていただこうとの思いだけでお看経をし、寒参詣や夏期参詣にも参っていました。その頃はよく、祖父とも自転車でお寺に参詣をしました。

高校生になって青年会御講に参詣するようになり、ご信心の仕方を学ぶようになりました。あるとき、試験の直前に青年会御講がありましたので、「試験勉強をしないといけないから、御講は欠席しよう」と思って休んだことがありました。しかし試験の結果は予想外に悪く、「お看経をしないと、やはり御宝前のお護りをいただけないなあ。ちゃんとお参りに行けば良かった」と反省をさせられました。

車の運転免許を取ってからは、お看経を怠けると事故を起こしたり、ヒヤッとすることが多く起こり、お看経の大事さを覚えていきました。最近でも仕事が忙しかったりして、お看経が十分でないときは、運転するのが怖いことがあるのです。

仕事をしていても、お看経の成果ははっきりと感じます。私は営業職ですが、お看経ができていないと、どんなに外回りをしても成約が思うように取れません。ところが朝晩のお看経が出来ているときは、次々に成約をもらったり、私が休日の間にも成約があったりと、ノルマはすぐに達成します。

ほかにもいろいろとお看経の不思議な体験があるのですが、最後に以前、四国布教区のキャンプでも発表した話をお話します。

五年ぐらい前のことです。当時、会社に、お互いに「こいつとは合わん」と思う同僚(以下、M君)がいました。二人がろくに打ち合わせもせず、バラバラに仕事をするので仕事ははかどらず、お互いにイライラする毎日でした。その頃、たまたま朝参詣の御法門で、「仲が悪かった相手のご先祖を供養しながらお看経をしたら、仲が良くなり、悩みが解決した……」という体験談をお聞きしました。そこで私も試しに、M君のご先祖を供養しようとお看経しました。すると急に意見が合い始め、会社の中でも一番仲が良い「相棒」となり、仕事も順調に進み始めたのです。

あるとき、私が夜遅くに出張から帰ってくると、まだ全員が忙しそうに残業していたことがありました。そこで私もその仕事に加わると、それまで険しい顔をしていたM君が、「岡さんとは、ここまで気が合うんやなあ」と言って穏やかな顔になり、お陰で仕事も早く終わったことがありました。人間関係は難しいと言いますが、M君との関係改善の御利益をいただいたときは、ほんとうにお看経の有難さを感じ、父が遺してくれたご信心に感謝をさせていただいたものです。今ではお互いにその会社を辞め、違う会社で働いていますが、休日には家族ぐるみの付き合いをしています。

これからも仕事がうまくいきますよう、また家族が無事に過ごせるようお看經に励み、この信仰を多くの人に勧めて、ご信心を磨いていきたいと思えます。

ありがとうございました。

(平成十七年八月十四日発表)

半身不随を免れて

第七連合第三事行組 石丸 卓

ありがとうございます。

平成十六年の十月八日の早朝でした。毎月八日はお寺の浄財奉納日で、家内が組の会計のお役を勤めていますので、いつものように朝参詣をして志納金を納めようと五時に起きました。ところが頭がふらつき、目が回り、起きあがることが出来ません。志納金は十時までに納めなくてはなりませんので、家内は「一人で電車で行ってくる」と言いましたが、八時頃には頭のふらつきも止まり、気分が良くなったので、お寺へ行くことにいたしました。朝参詣はできませんでしたが、本堂に上がらせていただき、御題目さまをお唱えし、お供水をいただいて、ここまで無事に運転して来れたことを感謝して帰路につきました。

お寺の往復には約一時間かかりますが、帰りも頭はふらつかず、目も回ることなく運転することができましたので、本当にありがたく思いました。御宝前さまに護っていただいているんだなあ実感をしました。

ところが帰宅すると間もなく、頭がふらふらし始めました。そこで掛かり付けの病院に一人で歩いて行きました。点滴をしてもらい、一時間ほど横になると、気分も落ち着いたので家に帰りました。しかし家に帰って昼食を摂ると、すぐに全部戻してしまいました。夕食はお粥を食べましたが、それも戻してしまい、食べられませんでした。さすがにこれは普通ではないと思い、朝が来るのを待ち兼ねて病院に行き、医師に相談して紹介状を書いてもらいました。ちょうど土曜日で娘婿が休みでしたので、紹介された貞本脳神経外科に連れていってもらいました。そのときにはもう身体はふらふらで、立っているのがやっとという状態でした。

貞本病院に着くと、すぐに検査に入りました。そして私は、即入院するようにと言われたのです。病名は「脳梗塞動脈硬化」でした。「もう半日遅かったら、半身不随になるどころでしたよ」と医師から言われ、驚くやら安心するやらでした。

入院は三週間と決まりました。治療と言えば毎日毎日点滴の繰り返しでしたが、その間、家内と息子たちはお寺参詣や自宅での御題目口唱に励んでくれ、毎日二本ずつお供水を病院へ運んでくれました。私もベッドの上に正座して、毎日御題目をお唱えさせていただきました。

一週間目にCT検査と血圧、採血、MRIの検査がありました。その結果、早くも耳の後ろの血管の閉塞はなくなっておりました。医師たちも大変驚いておりました。お陰で後遺症もまったくなく快復し、

三週間と言われた入院も二週間で無事に退院することができました。大きな御利益をいただいたと、大変随喜させていただいております。

御法さまのお陰で無事に早期快復できたことはもちろんですが、考えてみると不思議です。病気が発症して食事もできない状態で、お寺参詣の往復だけは状態が落ち着き、無事に車を運転できたのは、ほんとうに説明のしようがありません。また家族が心を一つにし、皆で御題目を唱えてくれたことも、とても有難く思いました。

退院一ヵ月ほどは車の運転を控えていましたが、体調もよくなり、元のように運転もできるようになりました。今はこうしてお寺参詣させていただけるのが、なにより大変嬉しく思います。私は仕事をしていた頃は、ご信心は家内にまかせっきりでしたが、退職と共に自分のできるご奉公を精一杯させていた。ただこうと考え、朝参詣や御講参詣、また他寺院の御会式参詣等に励んでまいりました。今回の御利益は、そんな御参詣のお陰かなあとつくづく思っているところです。

私は突然の病気を通して、いざというときの御宝前さまのお護りを実感することができました。これからできる限りご参詣に、ご奉公にと励んで参りたいと思っております。

ありがとうございました。

(平成十七年八月二十一日発表)

再就職の御利益

第八連合第二信要組 門田誠広

ありがとうございます。

私は平成十三年の十一月末に、会社の都合により退職しました。退職後は一週間に何度もハローワークへ通い、新しい職を探しましたが、適当な仕事は見付かりません。年齢的にも新しい職種で一から勉強していくのは大変ですので、私は以前勤めていた経験を活かして自動車関係の仕事をしようにと考え、大型の運転免許を取得しました。友人に大型ダンプを運転する会社を紹介してもらい、入社しましたが、人間関係が上手くいかず、何日か勤めて辞めました。

退職後、再びハローワークに通う生活が始まりました。若い人でも就職の難しい時代ですから、なかなか新しい仕事は決まりません。御法さまのお力添えをいただかないと、私の力ではとても再就職は難しいと思い、信心改良して口唱に励みました。幸い、今までよりも時間が自由になりましたので、できるだけご奉公もさせていただくことにし、組長のお役も受けました。慣れない組長のご奉公は何度か挫けそうにもなりましたが、皆さんに励まされ、少しでもご信者さんのお役に立たせていただけるよう頑張りました。

そんなある日、この職場なら続けられると感じた仕事に出会いました。早速応募し、面接にも行きましたが、結果は不採用とのことでしたので、まだまだご信心が足りないなあと感じました。ところが十日ほど経った頃、その職場から電話がありました。一度断られたのに、再度連絡をもらえたことを不思議

議に思い、事情を聞きますと、「欠員ができたので、まだ職に就いていないなら、もう一度面接に来ませんか？」というお話しでした。私は御法さまからチャンスをいただいたと感じ、早速面接に行きました。

面接の結果、「三日後から仕事に来てください」という連絡をいただくことができました。職種は、学校の施設の仕事ということでした。

十日ほど勤めた頃に、上司からバスの運転を頼まれ、桑原の方まで行きました。そしてそれから以後は、学校のバスも任せてもらえるようになりました。現在は学校の施設のいろいろな仕事と、学内で行事があるときにバスを運行することを中心に、楽しく仕事をさせていただいております。

約三年間も失業していましたが、御宝前さまからいただいた御利益で、無事に職に就くことができ、心から感謝をしております。今月の十二日に母が帰寂しましたが、今後は亡き両親の菩提のため、両親に負けないご奉公がさせていただけますよう努力していきたいと思っております。

ありがとうございました。

(平成十七年八月二十八日発表)

子供たちのご信心を通して

第九連合第一妙唱組 新山耕市

ありがとうございます。

私は平成二年に結婚するまで、信仰を持っていませんでした。実家は真言宗ですし、私の通った中学・高校はカトリックの学校でしたので、キリスト教の話は聞いていましたが、特に信仰心を持つことはありませんでした。

結婚式を挙げるにあたり、「松風寺で式を挙げて欲しい」という家内からの要望がありました。信仰を持つ人が、信じるもの前で式をあげるのは当然で、「かつこいいから教会で……」などという意味のないこととは違うと思いましたので、私は松風寺の御宝前での挙式に同意しました。

結婚後は、家内がお厨子に祀られた御本尊に向かい、毎日お看経をしている様子を見ておりました。やがて長男の裕樹がお腹にでき、私も家の中で中心になるものがある方が良いと思うようになりました。この宗旨がしっかりした土台を持つことは、結婚する以前から分かっておりましたが、結婚後にお寺参詣をしたり、御法門を聴聞させていただくうちに、本門佛立宗のご信心と、ご信者さん方のご信心に対する姿勢が非常にまじめなことを再確認しましたので、私は腹帯御本尊をいただくときに入信し、我が家に護持御本尊をお迎えさせていただきました。結婚して半年後のことでした。

それから早くも十五年になりますが、振り返ると、お陰さまで家族みんなが数々のお計らいをいただいていたと思います。

長男の裕樹(中三)は咽頭が弱く、小さい頃は一ヶ月から二ヶ月に一度くらいの割合で高熱を出しておりました。一度熱を出すと、五日位は下がりませんので、学校は一週間という単位で頻繁に休んでおり

ましたし、身体があまり大きくなりませんでした。しかし休日の朝参詣と、法鼓のご奉公をまじめに続けさせていただくうちに、小学校五年生になるころから不思議と病氣らしい病氣をしなくなりました。中学生になってからは二十センチ以上も身長が伸びて、本当に喜んでます。

長女の泉(中一)が小学校五年生のとき、私達家族は松山に引っ越してきました。泉は学校に慣れないところに反抗期が重なりました。母親に「学校に来て欲しくない」と言っただけで困らせたのです。家内が知り合ったクラスのお母さんにその話をしたところ、すぐに担任の先生に伝わりました。すると先生は嫌がる泉を説得して、初めての裁縫の授業に、先生のお手伝いとして家内を招くことを提案されたのです。初めて針と糸を使った子供たちが、家内と一緒に作品を完成させて大喜びしているのを見て、泉の気持ちも変わっていったようです。それからは反抗期も一段落したと聞きました。

最近知ったことですが、そのときの担任の中谷洋子先生は、五連合第一本清組に所属されているご信者さんでした。この不思議なご縁に、改めて御宝前に見守られていることを感じさせていただきました。

次男の拓実(小四)に「御利益をいただいたことがあるか」と聞きますと、彼にもありました。スポーツ少年団で、小学二年生からソフトボールのレギュラーをしている拓実は、試合がある日は朝六時半や七時の集合ですので、上の二人のように休日の朝参詣がなかなかできませんでした。ところが小学四年生になって体力もつき、試合前がんばって朝参詣をしたことが二回あります。するとどうでしょう。負けてばかりだったチームですが、拓実が朝参詣をして臨んだ試合は二回ともホームランを打つなどの大活躍をし、そしてリーグ優勝したのです。拓実はそのことを、嬉しそうに話してくれました。まだまだやんちゃな盛りで悪さもしますが、「御宝前さまの目はごまかせない」ということはよく分かっているようです。

今日は御宝前に護られる子供たちの、ほんのいくつかの姿をご紹介しましたが、私が本当にお計らいをいただいていると感じるのは、家族が健康であり、毎日が平穏であることです。お寺の行事が生活の中心となっているので、家庭でも会話の絶えることがなく、家族がまとまっていると感じます。生活していく中で病氣や事故、また子育てや仕事などで困難に直面し、悩むこともありますが、ご信心は人生の指針になるものですから、家族みんなが同じ方向を向いている限り大難は小難に、小難は無難にさせていただいていると実感しています。

今後も家族そろってご信心のできる家庭を目指してがんばります。

ありがとうございました。

(平成十七年九月四日発表)

御宝前のお護りを感じた闘病生活

第十連合第一大歓組 戸井田順子

ありがとうございます。

私は大きなご奉公はできませんが、長く御宝前のお道具販売のご奉公をさせていただき、ご荘厳の大

切さも、機会を見ては皆さんにお話ししてまいりました。ですから自宅の御宝前さまへも、いつどなたが来られても恥ずかしくないお給仕を心掛け、御導師さまや御講師さまに褒めていただくことをささやかな喜びとしておりました。そんな日々のお給仕の積み重ねで頂戴した御利益を、ご披露させていただきませう。

平成十三年七月一日のことです。月始総講のご参詣も無事に終え、お寺の門を少し出たとき、急に頭がふらつきました。足が地につかず、何か変だと思い、私は急いでタクシーを拾って帰宅しました。家に着くと御宝前さまにご挨拶させていただき、お供水をいただいて横になりました。やがて主人が仕事から帰ってきて、横になっている私に気付き、「どうかしたのか」と尋ねましたが、そのときはまだ、大きな病気に罹っている自覚がありませんでしたので、「心配ないよ。少し気分が悪いだけ」と答えました。主人は心配して「病院に行こうか」と言ってくれましたが、私は断り、そのまま休みました。血圧は少し高めでした。

翌朝、血圧を計ると少し下がっていたので、病院へ行くのはもう少し様子を見ようと思いました。ところが五日の夜中になって、私はトイレで倒れてしまったのです。戸を開けっ放しにして、うつ伏せになっている自分に気付き、「なんでこんなところにいるんだろう」と思って立ち上がろうとしましたが、身体が言うことをききません。必死の思いで主人を呼ぶのですが、主人は以前の仕事の関係で難聴になっていましたので、私が助けを求める声に気付いてくれませんでした。

そのうち意識がモウロウとして、どの位い経ったのでしょうか。亡くなった母の呼ぶ声がして、私は目が覚めました。そこで私はもう一度床を叩いたりして、できる限りの声で主人を呼びましたが、やはりだめでした。ようやく私は「自分で何とかしなくては」と覚悟を決め、這うようにしてやっとの思いでベッドにたどり着き、倒れ込むようにそのまま寝てしまいました。

主人はお寺の掌典課長のお役をいただいております、他の課員の皆さんと交代で、朝参詣のお給仕のご奉公をしております。翌朝は当番に当たっておりましたので、早い時間に私を起こしにきました。私は「フラフラしているなあ」と思いながらも、車でお寺へ連れていってもらいました。お寺への道中、主人は私の様子がおかしいと言って、「眠いのか」と聞きますので、「何言ってるのよ。昨夜はたいへんだったんだから」と事情を話しました。すると主人は、「起こせばよかったのに」と私の気も知らずにとぼけたことを申します。思わず笑ってしまいました。まだ私は体調の変化を、軽く考えておりました。

その日は朝参詣も無事に終え、何事もなく帰宅することができました。主人は「今日は病院で診てもらった方がいい」と言ってくれましたが、朝参詣もできたことだし、御宝前さまにお縋がりして、しっかりご祈願させていただこうと決心し、その日から毎日、家での口唱に励ませていただくようにいたしました。ただ、体調はなかなかすっきりせず、家の中に籠るようになっていきました。

そんな私の様子を心配して、組長の矢野さんと副組長の大政さんがお助行にきてくださいました。調子が悪くなってからは、御修行日や役中御講の参詣も、お道具係のご奉公も、少し懈怠気味の私を氣遣ってのお助行でした。そこで二人に先日の話をすると、「何をさておいても、とにかく病院で診察してもらいなさい。原因が分からないことには対処もできませんよ」と言われ、八月一日に検査を受けることになりました。

検査の結果、頭に二個の血栓が見つかりました。薬を貰って帰りましたが、服用するたびに三十分く

らいして食べたものと一緒に吐いてしまいます。「これはおかしい」と思って先生に尋ねると、内科の先生を紹介されました。そこで今度は胃の検査をすることになり、胃潰瘍が見つかって、「しばらく胃薬を服用してください」と言われました。次々と見付かる病気に不安を覚えつつ、それでも私は「御宝前さまが護ってくださる」と楽観的に考えて、家での口唱に励んでおりました。

ところが、言われるままに薬を飲んで数日後のことです。私は、今まで経験したことのない目眩に襲われました。二十四時間ベッドにしがみつき、身動きもできず、それはそれは「耐えられない」と思うような苦しみでした。翌朝主人に病院に連れていってもらい、そのことを先生に話すと、「丸一日も放って置いて、命にかかわったらどうするのですか」と叱られました。そしてMRI検査の結果、脳動脈瘤が見つかったのです。ずいぶん遠回りをしましたが、やっと体調不良の原因が分かり、適切な治療ができるようになったことを、御宝前さまのお陰と素直に喜ばせていただくことができました。

心配した脳動脈瘤の方も、いろいろと調べていただいた結果、「この程度なら手術は必要ありません。無理をせず、水分を大目に摂ってください」と言っていただくことができました。考えてみたら、苦しい思いはしましたが、入院という最悪の事態に至らなかったのは、ほんとうにお計らいだったと感じました。主人にも迷惑を掛けましたが、家にいることができたのは不幸中の幸いでした。そして、「どんなときでも御宝前さまはお護りくださる」と強く実感し、口唱に励みながら闘病生活をさせていただきました。

今はご参詣ができる程度には快復しましたが、今後は一日も早く元通り健康になり、また皆様と一緒にご奉公させていただきたいと思っています。

最後になりましたが、御講師さま、婦人会長さん、組内のご信者さん、お見舞やお助行をいただきありがとうございました。皆さんの励ましがどんなに心強かったか、一緒にお唱えする御題目さまがどんなに有難かったか、心から御礼申し上げます。

ありがとうございました。

(平成十七年九月十一日発表)

母の思い出

第一連合第一妙泉組 河野久子

ありがとうございます。

私のご信心のお手本だった母・道岡トクエの思い出をお話しさせていただきます。

母の入信のきっかけは、私の姉の病気でした。大分に嫁いでいた姉が肺侵潤(肺尖肋膜炎)にかかり、幼児が二人いましたので、感染するといけないと養生に帰ってきたのです。まだ戦時中のことでした。

このご信心のことは、以前に叔父が「有難い信心じゃが、おしんか(しませんか)?」と母に勧めていましたので、私も知ってはいましたが、そのときは困ったこともなく、入信しませんでした。私自身も当時通っていた喜多小学校の集団登校で、大洲駅の近くを通るといつもカチカチと拍子木の音が聞こえ、

皆で見上げて通っておりましたので、子供の頃から何となく恥ずかしい印象がこのご信心にありました。

姉が養生に戻った頃は、私も大洲病院に勤めるようになっておりました。大洲病院でレントゲン検査を受けた姉は、肺に少し影があり、治療に半年はかかるだろうと診断されました。私は病院で消毒液をもらい、家に帰ると姉の消毒したり、注射を打ったりして看護しましたが、食料難で栄養になるものは中々手に入らない時代でしたので快復が遅く、皆が出かけて一人になると、姉は毎日泣いて過ごしていたようです。

そんなとき、東京から疎開して来られていた田宮達太郎さんにご信心を勧められ、藁をもつかむ思いで我が家は入信いたしました。田宮さんは松本さんの家で事務の手伝いをしながらご奉公をされておりましたので、入信後は昼間は姉が一人でお看経をし、夜は田宮さんやご信者さん、そして私共家族が揃って毎晩お助行をさせていただきました。「一日も早く元気になって、子供たちのところに帰りたい」、そんな思いで一心に御法さまにお縋りさせていただく日々でした。

そして一ヵ月後のことです。病院に行きますと、先生が前のフィルムと並べてご覧になり、「確かにあった影がなくなっています」と驚かれ、「もう大丈夫ですよ」と証明書をくださったのです。本人はもちろん、家族も大喜びで、早速家に帰って御礼のお看経をさせていただいたのを覚えています。以来六十年になりますが、姉は一度も病気をせず、現在もご信心に励んでおります。

この御利益を見せていただいてから、母は一生懸命にご信心をさせていただくようになりました。御講願主になると、何ヶ月も前から配給のお米を少しずつ貯めて「にごみ」という炊き込みご飯を作り、御老尊やご信者さんにご供養させていただいては喜んでおりました。

入信して間もない頃だったと思いますが、ガラスの割れるすごい音がしたので、驚いて見に行くと、母がガラス戸に首を突っ込んでいたことがありました。母は御宝前の部屋から廊下に出ようとして、足がもつれたのでしょう。私はびっくりして咄嗟に御題目を唱え、飛び散ったガラスを片付けました。母の頭の周りには、尖ったガラスが何本もあって、どう片付けたかは覚えてないほどの凄まじい光景でしたが、落ち着いてから母を見ると、頭も首も、どこにも掠り傷ひとつありませんでした。刺されば命もないはずですが、ほんとうに不思議でした。そして、「これも毎日のお看経のお陰」と、母と二人で喜ばせていただきました。

終戦後、五十歳を過ぎた母は一人暮らしをしておりましたので、近所に住む私は時々話しに行っておりました。この頃、急に顔色が悪くなり、元気がなくなったので、病院に行くよう勧めたことがありました。すると母は、「大丈夫。毎日お供水さんをたくさんいただいているから」と答えました。数日後の夕方、母を訪ねると、ちょうどお看経の最中でした。いっしょにお看経をしておりますと、吐き気がするというので急いで洗面器を用意したら、母は吐血しました。そして、その吐瀉物の中に、小さなコブシほどの塊があったのです。私は驚いて「すぐに病院に行こう」と言いましたが、母は「スーッと楽になったので、少し休む」と言ってそのまま横になりました。少し落ち着くと、「御宝前さまがきれいにしてくださった」と喜んで御礼のお看経をしますのです。私は少し心配をしましたが、母はそれから日増しに顔色が良くなり、間もなく畑に行けるまで元気になりました。

母の口癖は「もったいない」と「有難い」でした。母の子供の頃はお弁当を竹の皮に包み、本を入れた風呂敷といっしょに腰に巻いて、川舟に乗って学校に通ったそうです。家に帰れば鎌や鋤が出してあ

り、「今日はどの山」「今日はどの畑」と書いてあって、道具を担いで手伝いに走る生活だったようで、ほんとうに苦勞して育ったのですが、いつも両親には「そうして教え、鍛えてくれたお陰」と感謝をしておりました。もちろん私たち子供にも、「いつもすまんのう」「世話をかけるのう」と感謝の言葉を忘れませんでした。

豊かな生活ではありませんでしたが、こつこつとお金を貯めては御有志に気張り、本山や第九弘通区婦人連盟、松風寺や大法寺からも、たくさんの随喜状をいただいて、「有難い、有難い」と喜んでおりました。御有志があるときは、すぐに「どうしたらエエの？」と聞くものですから、「自分ができる精一杯をさせてもらったら」と言いますと、すぐに「これ、お願いします」と持ってきます。その志には、いつも主人と感心をしておりました。

ご参詣も大好きで、御講席が遠くてご参詣できないときにはとても残念がって「損した、損した」と言っておりました。ですから大法寺からは晩年、「老軀を顧みず、雨にも風にも雪にもめげずの開門参詣、誠に範とも言うべし」という随喜状もいただくことができました。

父は九人の子供を遺して早く亡くなりましたので、母は「朝は朝星、夜は夜星」と懸命に働きながらご信心に励み、子供たち皆を結婚させ、すべて法灯相続しました。昭和三十七年五月には、大洲公民館長と市長さんから「世の母親の模範である」ということで、表彰状と記念品をいただいた母でした。

たくさん、たくさん教えられました。どれも主人と、「婆ちゃんにはかなわんのお」と話していた思い出ばかりです。一つひとつを思い出しながら、少しでも母に近づけますよう、がんばりたいと思います。

ありがとうございました。

(平成十七年九月十八日発表)

信心改良で、老いてますます元気に

第一連合第一妙泉組 進美恵子

ありがとうございます。

今日は、今年九十六歳になる母の御利益談をご披露させていただきます。

平成十五年十月十八日の夕刻のことです。廊下で転倒し、激痛で動けなくなった母を、主人が何とか抱えて車に乗せ、病院に連れていきました。そしてレントゲン検査の結果、左大腿部骨折と診断され、そのまま入院することになったのです。

さて、手術ということになるのですが、母は年齢的にも問題が大きく、当初から難しい手術になると言われておりました。他にもいろいろと悪条件が重なったので心配されましたが、結局二十三日に手術することとなりました。二時間半もの間、お教務さまはじめ大勢のご信者方のお助行をいただいて、手術は無事に成功いたしました。その節は本当にありがとうございました。

その後、母は六ヶ月間の入院生活を送ることになるのですが、手術のショックが大きかったのか、そ

の間、歌を忘れたカナリヤのように、母は御題目をまったくお唱えしなくなりました。主治医からは、「入院中に施設を探して入居させた方がいいですよ。このままでは痴呆は進むし、一生車椅子の生活になるのは間違いありません。自分で尿意すら分からない状態で退院すれば、家族の負担が大きすぎますよ」と、再三再四施設入りを勧められました。骨粗しょう症が進み、何度も骨折しては持ち前の気丈さでご信心で元気に快復してきた母ですが、さすがに今度ばかりはダメかも知れないと私も観念し、枕元に付き添っておりました。

しかし、長年ご信心に励んで頑張ってきた母が、いくら高齢が原因とはいえ、最後に一番たいせつな御題目を忘れてしまったのでは、こんなに無念なことはありません。そこで私は、「何とか母がもう一度日常生活が送れるようになるには、御法さまにお継がりして、ご信心を改良させていただくしか方法はない」と思い、平成十六年四月十八日、家に連れて帰りたいと退院願いを出したのです。

家に帰ってからの母は、振り返ればいろいろありましたが、少しずつ、少しずつ、日常生活が送れるようになっていきました。寝たきりになってもおかしくないと言われた母でしたが、あれほどリハビリを嫌っていたのがウソのように、気が付けば寢室を抜け出して本堂に上がろうといたします。「また倒れて骨折されたら……」と心配する周囲をよそに、母の「本堂に参りたい」という一念は、母の身体を再び元気にしていったのです。そして一年後の平成十七年四月には信じられないほど快復し、なんと杖なしで歩けるようにもなりました。

現在、母は、家にいるときは一日に何度も本堂に上がり、御題目をお唱えするという生活を送っています。「さすがに長年培ってきたご信心」と感心させられ、同時に「ご信心の改良の力はすごいものだ」と改めて思いました。母は御宝前のお陰をいただいて、ほんとうにビックリするほど元気になりました。

昼となく夜となく御法さまに見守られて、母は幸せものだと思います。これからは残された余生を無駄にすることなく、ご信心に励んで貰いたいと願い、私もご祈願の口唱に励ませていただいております。

ありがとうございました。

(平成十七年九月二十五日発表)

祖父の功德に護られて

第三連合第二勸信組 山田多美子

ありがとうございます。

少し古いお話しですが、私が今まで数々いただいてきた御利益の中でも、一番「両親の功德に護られて生きている」と感じた、息子の御利益談をご披露させていただきます。

昭和五十三年頃のことです。高校を卒業して自動車の免許を取ったばかりの息子は、嬉しさのあまり私の娘の車を借りて、北条から山手に入った「儀式」という場所へ友達を送って行きました。まだまだ運転に馴れない息子が、初めての道を車で走ることに、義母や私は心配しながら見送りました。

何時間経ったのでしょうか。「戻らんなあ。遅いなあ」と言いながら夜のお看経をしていると、九時頃

でしたか、電話がかかってきました。私が妙な胸騒ぎを感じながら電話を取ると、「こちら、儀式の農協の前の渡部ふとん店ですが、お宅の息子さんが北条の立岩川に車ごと落ちました。連れに来て下さい」という事故の知らせでした。私は、最も恐れていた不安が的中したショックに驚きながら、「息子は怪我をしているのですか」と尋ねると、渡部さんは「本人に代ります」といって息子を電話口に出してくれました。「どこにも怪我はない。早く迎えに来て」と言う電話口の声が、震えているのが分かりました。

「儀式、というのはどこだろう」と家族で相談していると、それを聞いていた娘が「北条の儀式という山奥の方らしい。私の友達のお兄さんがトヨタに勤めているから連絡とってみる」と早速電話をしてくれました。するとその方は、これから帰宅しようとしていたにもかかわらず、すぐに駆け付けてくれて、私たちを連れて北条まで走ってくれました。

渡部ふとん店にたどり着くと、息子は私たちの顔を見て一言、「暗くて恐ろしかったあ」とホッとしたように言いました。事故の様子を詳しく尋ねると、友達を送った帰り道に、暗いカーブが曲がり切れずに河原に落ちてしまったということでした。幸い怪我はなかったのも、上の道路まで駆け登って、自動車が来るのをじっと待っていたそうです。寂しい場所で、通る車もほとんど無かったようですが、やっと通りがかった渡部さんに助けを求め、家に連絡を取ることができたとのことでした。

渡部さんは動揺している私たちに、「あの場所はガードレールもないし、街灯も薄暗いので、カーブで何人かの人が落ちています。亡くなった人はいませんが、みんな怪我をしていますよ。スピードを出していなかったのも、茅で手を切ったくらいで済んだんでしょう。川に水がなかったのも幸いでした。お宅の息子さんは運がいい」と言ってくださいました。なるほど冷静になって考えてみると、もし同乗者がいて、怪我でもさせていたら大変なことになっていました。私は「お友達を送った帰りで良かった。御宝前さまがお助けくださったのだ」と感じ、感謝の気持ちで一杯になりました。もちろん家族も、同じ気持ちでした。

それから一週間ほどして城北組の御講がありました。御講席でこの話をすると、組長の加藤照雄さんも、副組長の櫻井輝子さんも、口を揃えて「それはお爺さん(元事務局長だった山田峯松)やお婆さん(コメヨ)のご信心のお陰ですよ。大きな御利益をいただいたのだから、これからは貴女がご両親の後をしっかり相続して、子供さんたちにもご信心を持たせてあげなさい」とお折伏して下さり、息子の御利益を大変喜んでくださいました。

あれから早三十年近くになりますが、思えば息子を助けていただいたこの御利益が、私のご信心に大きな転機をもたらしたのは間違いありません。息子は今、二人の子供の父親となり、御会式や休日の朝参詣にはときどき参詣してくれますが、まだまだ仕事や育児に追われて充分なご奉公ができずにおります。しかし、ご信心に熱心だった私の両親の功德で息子が護られたように、私たち夫婦の積んだ功德で息子夫婦や孫たちが御法さまにお護りいただけますよう、そしてその御利益が息子の家族の信心相続のきっかけとなりますようにと願い、素直・正直にご奉公を努めてまいりたいと思っております。

ありがとうございました。

(平成十七年十月二日発表)

御宝前さまを中心に家族で暮らした日の思い出

第四連合第三長寿組 岡喜代子

ありがとうございます。

私の入信のころのお話をさせていただきます。

私は子供のころから身体が弱く、肋膜炎や腹膜炎、腎臓と次々に病気をしていました。そんな私の様子を見かねて、姉の佐々木トミ子が嫁ぎ先の信仰、本門佛立宗のご信心を勧めてくれました。私は姉が嫁いでから、佐々木家で御講やお助行のあるたびに手伝いに呼ばれ、自然とご信心の有難いお話しや、御利益をいただかれた方のお話しをお聞きしていましたので、素直に御題目をお唱えさせていただくようになりました。

入信後間もない昭和二十六年の暮れのことです。姉の家でお助行がありました。私がお参りすると、その席に男の子を連れた男性のご信者さんがおられました。お看経が終ると、姉がその男性を紹介してくれ、「この人はご信心もよくするし、仕事もよくする働き者じゃ。ただ、子供を連れているので、何か大変やから、あんた、行って子供の面倒みてあげたら」と言いました。それが今の主人、岡福一との出会いでした。私は驚きましたが、「ご信者さんの家に嫁いで一生懸命ご信心させていただいたら、身体も丈夫にしていだけるのではないか」と思い、姉の熱心な勧めもあって、岡家に嫁ぐ決心をしたのです。

嫁いでみると、小学校三年生の男の子を筆頭に、小学校一年生の女の子、そしてお助行の席で見かけた当時四歳の男の子と、私は一度に三人の子持ちとなり、それはそれは大変な毎日が始まりました。主人とは夜のご奉公に出かけることが多かったものですから、私はまず、家族のみんなとこんな約束をしました。

子供たちとの約束は、夕方の四時には必ず家に帰ってくる。そしてみんなで一緒に御宝前さまの前でお看経をすること。五時には夕食を食べて、それからは勉強も遊びも自宅で過ごすことです。主人とは、夜の御講席やお助行には一緒に行くことを約束しました。みんな私との約束をよく守ってくれましたので、ご奉公に忙しい毎日でしたが、夕方には家族が揃ってお看経をし、また一緒に夕食をとる習慣ができ、一緒に会話を楽しむことができました。

そんなある日、次男の頭にでき物ができたことがありました。主人は迷わずカミソリで開き、膿を出しました。そしてお供水さんとお寺でいただいたお灰を傷口に付けました。数日それを繰り返すとすっかり良くなり、傷跡も残らず、髪の毛も傷跡からちゃんと生えてきました。それからは私の家では、子供が怪我をして帰ってくると、いつもお供水さんとお灰で治していただきました。傷にお灰を付けることを、近所の子供たちからかわれたこともあったようですが、それでも子供たちが、御宝前さまに治して貰えることを一番よく知っていましたから、気にも留めずに親子でお供水さん、お灰の素晴らしさに喜びあうことができました。

思い出すとあの頃の我が家は、いつも家族の中心に御宝前さまがいらっしゃいました。お陰さまで子

供たちは素直で朗らかに、そして病気をすることもなく育ちました。病気がちだった私の身体も、知らない間に元気になっていただきました。本当に御宝前さまにお守りいただいた、お陰と喜びの毎日でした。

主人と結婚して五十年が過ぎました。今、それぞれの子育てを終えた子供たちが、私たちを本当に大切にしてくれます。私自身、ご信心をさせていただいたお陰で、弱かった身体を丈夫にさせていただきました。今の私は病気もせず、来年には九十歳を迎えようとしています。最近では主人とお寺参詣や御講参詣、お助行にお参りさせていただくことが私の一番の楽しみです。

有難いことに、ご信者さん宅のお祖師さまのご尊像におかけする「お綿」や「お裏頭」を縫わせていただくご奉公を、この歳になっても現役でさせていただいております。今後も身体の続く限り、このご奉公だけはさせていただきたいと思っています。

これまで私はたくさんの御利益をいただきましたが、今は子供や孫たちがしっかりとご信心してくれることを念願しています。そのために、これからも命の続く限り、子供や孫の法灯相続成就を祈願して、お看経に頑張りたいと思っています。

ありがとうございました。

(平成十七年十月九日発表)

改良と健康の御利益

第五連合第二本清組 加藤ヨシ子

ありがとうございます。

私は熱心な本門佛立宗のご信者さんの家に嫁ぎましたが、結婚のとき、主人はご信心のことは何も話しませんでしたので、しばらくは信仰に無縁な日々が続きました。主人の両親がとてもご信心を大切にしていることは、結婚して間もなく分かりました。しかし、若くて元気な当時の私には何の不安もなく、自分もご信心を学んでみようとは考えませんでした。

そんな私がご信心の大事なことに気付いたのは、長男を出産したときのことでした。妊娠後にご祈願をしたり、腹帯御本尊をいただくこともなく臨月を迎えたのですが、いざ出産のときには輸血を三本もする異常分娩で、産後も私は高熱が続いてひきつけを起こす状態でした。生まれたばかりの長男も母乳を吸う力がなかったので、すぐには会わせてもらえず不安でした。それでも何とか退院できましたが、退院後も貧血がひどく、夜中に病院へ走ることもたびたびでした。

そんな私の様子を見かねて、主人の母がご信心を勧めてくれました。「御法さまのお護りをいただいて、子供が丈夫に育つよう御題目をお唱えしなさい」という義母の言葉に、私はその場で入信を決めました。今まで元気だった自分がこんなことになり、先の不安をかかえていましたので、生まれたばかりの息子のためにも、仏さまにしっかりと護っていただきたいという強い思いがありました。

早速、我が家に御本尊をおまつりしていただき、御講も取らせていただくようになりました。御会式にも初めて参詣させていただきました。お陰さまで自然に身体も良くなり、子供も元気に育ちました。

「ご信心を始めて良かった」と、私は素直に思いました。ただ、この頃は主人も出張が多く、お寺までの交通の便が悪いこともあって、あまりお寺参詣は出来ていませんでした。「のどもと過ぎれば熱さ忘れる」という言葉がありますが、今思えばその通りで、やがて私は入信した頃の一途な思いが薄れ、ずいぶんのんびりとしたご信心をするようになっていきました。

数年後、私たちは主人の両親と一緒に暮らすようになり、私は義母に連れられて他のご信者さんの家にも御講参りに行くようになりました。間もなく主人が事務局のお役をいただき、日曜日の朝参詣や夏期参詣、寒参詣にも一緒に行くようになって、御法門を聴聞する機会が増えました。そして私は、ようやく正しいご信心の仕方を学ぶようになったのです。

お看経の仕方やお給仕の仕方も少しずつ変わりました。ご奉公のお手伝いもさせていただくようになりました。そんなある日、義母から「ヨシ子さん。近頃は風邪もひかなくなり、元気になったね」と言われて、私は自分の体調の変化に初めて気付いたのです。

私は冬場はもちろんのこと、夏でも一～二回は風邪をひき、熱を出しては二～三日寝込むのが当たり前前の状態でした。ところがその頃は貧血も治り、風邪もあまりひかなくなっておりました。「これが御利益かな」と有難く思いました。

私にご信心の手ほどきをしてくれた主人の母を送ってからは、私たち夫婦は私の母と同居するようになりました。母の住まいは道後公園のそばでしたので、お寺がずいぶん近くなり、お寺参詣も多くなりました。

ところがある日、突然私の両耳は、蓋をしたようになり聞こえなくなったのです。耳鼻科で治療して左耳は少しずつ聞こえるようになったものの、右耳は駄目でした。他の病院にもかかりましたが、突発性難聴との診断で、発症から三ヶ月以上経っているので治らないとのことでした。

右耳が聞こえないと、声のする方向が分からず、真っ直ぐに歩くこともできません。自然と斜めに歩くようになりましてので、お医者さん聞くと、「耳は治りませんが、他の機能が自然にカバーして、真っ直ぐに歩けるようになりますよ」と言っただき、ホッとしました。しかし、それからは年に三～四回は目が横ゆれして吐き、歩けなくなりました。この発作が起きるとお薬を飲み、点滴をして、二～三日安静にしていると治るという状態の繰り返しでした。

そこで私は一念発起し、「お寺が近くなったのだから、出来る限り毎日、朝参詣をさせていただこう。そしてもう一度、身体の御利益をいただこう」と考え、朝参詣を改良しました。そして朝参詣のあとの納骨堂でのお看経にも、お給仕のご奉公をさせていただくことにしました。お陰さまで近頃は、斜めに歩くようになると直ぐにトンプクを飲み、安静にしていると治るようになりました。最近では毎日朝参詣が続いていますが、今年はまだ発作が起きずにいますので、「御法さまがお護りくださっているのかな」と喜んでおります。

結婚を縁に御題目の信者となった私ですが、私の母も晩年は信者として御題目を唱え、今は松風寺の納骨堂に眠っています。妹の家族も入信し、今は少しずつご信者らしくなってきました。こうして皆でご信心ができるのも、やさしく見守ってくれた主人の義母のお陰と感謝をしています。まだまだご信心の未熟な私ですが、精一杯ご奉公をし、一日も早く一人前の信者になれるよう心掛けますので、皆さま、よろしく願いいたします。

ありがとうございました。

(平成十七年十月十六日発表)

御宝前さまが教えてくださる

第六連合第二本因組 岩城たかの

ありがとうございます。

私は今、病院に入院しています。九十四歳になりますので、老化から来る心臓病だそうです。でも幸せなのは、一週間に一度、家に帰れることです。土曜日に帰り、翌日の日曜日の午後三時までに病院へ戻るのです。家に帰ると、一泊二日を一人で過ごすこととなりますが、老人の一人暮らしも不安はありません。なぜなら、いつも危険を御宝前さまが教えてくださるからです。

これはごく最近のことです。いつものように土曜日の朝食が済むと、次男が車で迎えに来てくれました。九時頃に車が来て、家に帰る途中でスーパーに寄りました。御宝前さまのお花やお供え、そして自分の食べ物をたくさん買って帰るのです。

家に帰ると窓を開けて風を通します。そして私は御宝前さまの前に座り、「一週間の留守をお護りくださいまして、ありがとうございました」と御礼のご挨拶をしてお給仕をしました。一週間も閉じ込めであると、お花もお天目も大変なことになっていますので、いつも私は、真っ先に新しいものにお取り替えしてお看経をいたします。

息子は昼食を済ませると自分の家に戻り、翌日の病院に戻る時間に迎えに来てくれます。そして私は息子が帰った後、夕食は自分の好きなものをたくさん作って、ゆっくり一人でいただくのです。

家に帰った日曜の朝は、いつも御宝前さまのお給仕から始まります。私はそのとき、必ずお位牌を丁寧に磨きます。私の御戒壇には三つのお位牌があります。一つは主人、もう二つは子供たちです。その日もお位牌を磨きながら、子供の名前を呼んで語りかけました。「今日も暑いね」「今日は病院に戻るから留守番していてね」といろいろなことをよく話します。

ところで不思議なことに、そのお位牌があるときは重く、あるときは軽く感じる場合があります。その日の子供たちのお位牌は軽く感じられたので、「ああ、よかった。よかった」と言いながら元に戻しました。次に主人のお位牌を取ってお磨きしようとしたら、なんと、とてもとても重く感じました。「あら、お父さん、なにを知らせてくれているのですか？ 何に気をつければいいんですか？」と問いながら、私はお位牌を元のところに戻しました。そして「今日は何か変わったことが起こらなければいいがなあ」と思いながら朝のお看経を済ませ、病院に戻る荷物の準備して、朝食を済ませました。

それから台所の掃除、玄関の掃除をしていると、何事もなくお昼になりました。やがて次男が私を病院に送るために来てくれました。私は昼食の後、自分の使った食器や鍋、炊飯器等を洗って元のところにきちんと片付け、ガスを切って水も止めました。それから窓を閉めて、「これで台所は片付いた」と思って自分の部屋に戻り、病院に帰る着替えをして、御宝前さまに「また病院に行ってきます。留守を

お願いいたします」とご挨拶をしました。最後に電気を切って、荷物を持って玄関に出ました。しかし、なんとなく台所の窓が気になり、「閉めたはずだがなあ」と思いながらもう一度手を伸ばしてみると、私の腕が炊飯器に触りました。「あら、熱い」。なんと、洗って置いたはずの炊飯器の電源が入ったままで、熱を持っていました。元のコンセントも抜いていませんでした。そしてそのとき「ああ、このことだったのか」と主人のお位牌がとても重く感じられたことに思い当たりました。

「よかった、よかった」と言いながら、ふと部屋を見ると、なんだか少し赤いのに気付きました。「あら、豆電気がついたままだ。やれやれ」と独り言を言いながら、「これだこれだ。お父さんが知らせてくれたのは……」と納得しながら車に乗って、私は病院に帰ったのです。

病院に戻る道々、「御宝前さまが主人を使ってお知らせくださったのだなあ」と改めて感じ、深く御礼を申し上げました。

普段のお看経とお給仕をしっかりさせていただくと、御宝前さまは必ずお護りくださいます。最後にこのとき、私の詠んだ歌をご披露させていただいて、結びとします。

「おだやかに一日終わりし安らぎに 居住まい直し双手を合わす」
ありがとうございました。

(平成十七年十月二十三日発表)

家族が御法さまに護られている実感

第七連合第一事行組 高橋玲子

ありがとうございます。

私の母方の祖父は、熱心な天理教の信者でしたので、私も自然と天理教の教えの中で育ちました。やがて適齢になり、人の勧めでお見合いをしたとき、「口数の少ない人だなあ」と思っていた主人が、最初に「何かご信心をしていますか」と尋ねてきました。私は天理教にこだわるつもりはありませんでしたので、嫁いだ先のご先祖を大事にしたいと思い、本門佛立宗に入信して結婚することにいたしました。そして松風寺のお世話になり、高橋家の宗旨を守ることになったのです。

そのときご奉公くださったのが、今の第一事行組の皆さんでした。特に教化親となっていた増田さんご夫妻には、大変お世話になりました。初めての子を出産するため、新居浜に帰っていた私のもとに、腹帯御本尊をお伴していただいたことも、有難く思い出します。第一事行組のみなさんはとても明るく、若かった私たちが自然と溶け込める雰囲気を作ってくださいました。

そんな組の皆さんに支えられ、私たち家族はご信心を学び、御法さまから数々の御利益をいただきました。今日はその中のいくつかを、思い付くままにお話しさせていただきます。

結婚当初のことです。私たちは社宅に住んでおりましたが、主人とドライブがてら家を建てる土地を探しに出かけたことがありました。すると迷路のようなところに迷い込んでしまい、ふと前を見ると、十一区画に一軒だけ売れていないところがありました。話を聞くと、表示している価格より値引きをし

てくれるとのことでしたので、その日の夜には主人も決心し、その家を購入することになりました。ところが偶然決めた西垣生の今の家は、第一事行組の皆さんのお宅のすぐ側でした。そのとき私は、それは、たまたまそうであったのではなく、偶然以上の何かがあるように感じました。知らない土地でしたが、私はとても心強く感じ、それは現在に至っております。

結婚当初の我が家は主人の海外出張が多く、私は小さな子供と二人きりの生活に不安を感じ、ほとんど新居浜に帰っておりました。そのため入信はしたものの、とても今のようなご奉公やお参詣はできていませんでしたが、それでも御法さまにお護りいただき、主人も海外への移動の際などにいろいろと御利益をいただいていたようです。

記憶に新しい所では、名古屋・小牧空港で中華航空機の墜落事故がありましたが、主人は当初、事故にあった飛行機に搭乗する予定だったのだそうです。ところが何かの都合で便を遅らせたために、難を逃れることができたと言っていました。その話を聞いたとき、私は心から御法さまに護られていることを実感したものです。

父親がいつもいないので、子供たちには寂しい思いもさせました。また私は、留守の多い父親の分もと思い、随分厳しく躾をしてきたので、やさしいお母さんでばかりはいられませんでした。そんな子育てに悩んだときも、私の心を支えてくれたのは御法さまでした。

主人が留守がちの我が家で、いつしかご信心を支えにすることが当たり前になっていった私にとって、辛かったことが一つありました。主人の姉が創価学会の熱心な信者でしたので、事あるごとに私に入信を勧めてきたことでした。しかしこれも、主人が頑として聞き入れず、「父親がこのご信心で見送られているから」ときっぱり断ってくれましたので、今ではその煩わしさもなくなりました。

ご信心を定めることが出来たお陰で、今では子供たちも無事に大きくなり、私自身も組のご奉公がさせていただけるようになりました。

昨年のことになりますが、初めて連合御講(御導師御講)の願主を勤めさせていただきました。きっかけは、副組長の岡西妙子さんが「高橋さん、きっと良いことがありますよ」と勧めてくださった一言でした。その頃、今年二十六才になる娘が、「お母さん、私を貰ってくれる人いるかなあ」などと言っておりましたが、無事に御講を勤めて間もなく縁談がまとまり、来月には嫁ぎます。これも御講奉修の御利益と喜ばせていただいております。

主人との結婚を機に、この本門佛立宗のご信心に巡り合い、御法さまに護られて幸せに暮らすことができていることを思うとき、感謝と喜びの思いで胸が一杯になります。これからもご信心を中心として、心温かな家庭を作っていきたいと思います。

ありがとうございました。

(平成十七年十月三十日発表)

あきらめない

ありがとうございます。

私は現在、家の事情で西条佛立寺に所属しておりますが、松風寺の第一信要組の皆さんと日々のご奉公をさせていただいております。このたび、同居している主人の母が入信し、朝参詣や御講参詣をいっしょに出来るようになりましたので、ぜひその喜びをご披露して欲しいとお話しをいただき、発表させていただくことになりました。宜しく願いいたします。

私たち夫婦は、結婚して三年が過ぎた頃から主人の両親と同居することになり、早いもので二十四～五年になります。同居を始めた当初、主人の父が脳血栓で倒れ、私の母が西条からしばらくお助行に通ってくれましたので、思い切って入信を勧めたことがありました。しかしそのときは、私が佛立宗のご信心をするのはかまわないが、家の宗旨を変えることはできないとキッパリ断られ、子供の頃から家族で佛立信心に親しんできた私としては、何とも残念な思いをしたものでした。

主人はもともと信仰には関心の薄い方でしたので、以来二十年近く、我が家は私一人が西条佛立寺のご奉公に出させていただいております。松山からのご奉公ですから、充分なことは出来ませんでした。それでも私のご信心の姿勢を見て、「私が死んだら、貴女のご信心に変えてもいいよ」と二十年の間に主人の母も、少し気持ちを変えてくれました。

平成十年の春のことです。私は大きな悩みを抱えて松風寺への朝参詣を始めました。高校生になった次男が進路に悩み、精神的にも不安定になっていたのです。頼るところはご信心しかありませんが、西条までの日参はとても叶いません。そこで近い松風寺へ朝参詣し、何とかお計らいをいただこうと考えたのです。

御利益は靦面に顕れました。朝参詣をさせていただいた初日から、次男は素直になったのです。それからの次男は、日を追うごとに落ち着いていきました。それは私が朝参詣を始めてから、はっきりと分かる変化でした。この御利益を目にした母は、私がお参詣やご奉公に出かけるたびに、「ご苦労さん」とやさしく声をかけてくれるようになりました。

結婚以来、いつかは母のお教化をと思いつつも、同居を始めた頃にキッパリと宗旨変えを断られ、なかなかきっかけがつかめずにおりました私が、もう一度頑張ってみようと思ったのは、昨年二月に私が体調を崩し、緊急入院をしたときでした。今、振り返ると、この入院は御法さまからの「早く何とかしなさい」とのお知らせだったように思います。十日間ほどの入院でしたが、五十の坂を越した私は「いつまでも若くはない。母より先に逝くかも知れない」とそのとき痛感したのです。そして「家族がご信心を知らないまま、法灯を絶やしては一大事」と思い、「まずは母が御題目を唱えられるようになって、御利益を感得してもらわなければ。もう、ゆっくりしている時間はないのだ」と病院のベッドで考えたのです。

この頃、母には一つの悩みがありました。その悩みは、私に相談されても解決の見通しが立たないものでした。そこで私は退院してすぐに、母にこう言いました。「私はこのご信心のお陰で、主人やお母さんとも出会えたし、大事にされて幸せに暮らしてこれました」と。そして六年前に次男がいただいた御利益の話をし、「お母さんの悩みも、朝参詣をして何とか解決できるようご祈願しましょうよ。きっと心が晴れるから」と朝参詣を勧めたのです。

長い家族の歴史の中で、母も年を取り、嫁に任せてみようという気持ちになってくれたようです。早速二人連れ立っての朝参詣が始まり、一ヵ月後に母は、入信をしてくれました。

今では毎日がお寺参詣で始まり、日課の一つにも朝晩のお看経が入った母は、「お参りに行かない日が続くと、何か気分がすぐれないね。忘れ物をしているようだよ」と言うほどお寺参詣を楽しみにしています。悩み事も口にしなくなり、就寝前には「明日は何時に行くん？」といつも私に聞くのです。

主人は青果市場に勤めていますので、私たちが出かける頃にはもう仕事に出っていますが、お寺参詣は私といっしょなので安心なようです。こんな私たちの姿を見ているせいか、昨年は初めて自宅で御講を取ることができ、主人は団参にいっしょに参詣してくれるようにもなりました。また遠方にいる主人の弟妹も、御題目を頼りにした母の穏やかな老いの姿を耳にして、喜んでくれています。

朝参詣の功德は、ほんとうに大きな御利益があると思います。母の入信で、家族で佛立宗のご信心ができるようになることは、幸せを招く大きな果報だと知りました。

他家へ嫁いだ女性の多くは、婚家の宗旨云々でご信心の相続を諦めがちですが、「何百年も前から同じ宗旨が続いている家はほとんどない」と教わったことがありますし、私は自分の体験からも、決して嫁ぎ先の家族に理解してもらうのは、自分が諦めない限り不可能ではないと思います。

私も今後、主人や息子がご信心に目覚め、ほんとうに家族揃ってご信心ができますよう、口唱と参詣に努めていきたいと思っています。

ありがとうございました。

(平成十七年十一月十三日発表)

お助行を受ける心強さを実感

第九連合第二妙唱組 田原晴子

ありがとうございます。

私が入信したのは、身体が丈夫ではなかった、今は亡き主人のご祈願のためでした。元連合長の森敬吾さんのお母さん、森キヨさんにご信心を勧められ、初めて御題目をお唱えした日から早くも三十年を超えますが、お陰さまで様々な御利益をいただいて、今日まで過ごすことができました。今日は最近私が頂戴した、大きな御利益のお話をさせていただきます。

私は若い頃から勤めに出ておりましたので、平成四年に無事退職したときは、「これでようやく一段落できるなあ」と思っておりました。ところが毎日の生活のリズムが変わったためでしょうか。仕事を辞めてからの私は、体調を崩すことが多くなったのです。

もともと血圧が高かったので、私は近くの医院にかかっておりました。そこの先生からも、「一度精密な検査を受けたらどうですか」と言われておりましたが、気が進まず、そのまましておりました。実はそのころ、胸に痛みを覚えることがあり、少々不安はありました。しかし乳癌や胃癌、子宮癌の検査では異常がありませんでしたので、焦る気持ちもありませんでした。そして「調子が悪くても大病し

ないのは、御法さまにお護りいただいている証拠」とのん気に構えておりました。

ところが試しに血液検査をしてみると、心臓もしくは筋肉に異常があるとの結果が出て、すぐに三津の済生会病院を紹介され、検査入院をするよう言われました。まさか心臓に異常があるとは思いませんでしたので、私はたいへん驚きました。そしていつもお供している懐中御本尊さまといっしょに、入院をしたのです。平成十四年十二月十六日のことでした。

入院してからの私は、ベッドの枕元に懐中御本尊さまをご奉安して、時間を見つけては御題目をお唱えしておりました。私は仕事をしている頃から、家から一歩でも出るときは、必ず懐中御本尊をお供しておりました。通勤にはバイクを利用していましたし、買い物に行くときも、もちろん団参や旅行に行くときも、肌身は離さずお供しておりました。そんな、いつも私をお護りいただいた懐中御本尊さまが側にいらっしゃることで、私の不安は大きく癒されたと思います。

さて、精密検査の結果、心臓の三本の大動脈のうち、一本がすでに使えない状態になっており、残りの二本も中が詰まって正常な働きをしていないことが分かりました。医師からは「しばらくこのままにしておく、命にかかりますよ」と言われ、早速手術して治療を行なうことになりました。

私の手術は、心臓の大動脈にバイパスを作って血液の流れを正常化するという、大掛かりなものでした。しかも、済生会病院では設備が整わないため、愛媛県立中央病院に移って行なわれることになりました。そこで年が明けた平成十五年一月六日に転院し、早速九日に手術を行うことが決まったのです。

ところが私は転院と同時に発熱し、とても手術ができる状態ではなくなり、手術は二十一日に延期されました。当時はインフルエンザが流行しており、その影響を受けたようでした。当初予定されていた九日には、寒参詣も始まっており、多くのご信者さんがお助行の待機をされていたと後日聞き、たいへん申し訳なかったと思いました。

二十一日、いよいよバイパスの手術が行なわれました。当日は早朝からの、六時間にも及ぶ手術でしたが、毎日ベッドでお看経ができたことや、手術中はお助行がいただけると聞いていたことで、大きな不安はありませんでした。ご信者の皆さんには長い時間、お寺の本堂でたくさんの方のお助行をいただき、お礼の言葉もありません。ほんとうに心強く感じました。ありがとうございます。お陰さまで手術は無事成功しました。術後の痛みもなく、私は順調に快復して、二月十五日には晴れて退院することができました。

今回の入院を通して、私は皆さんに支えられるお助行の有難さを痛感しました。そして今後は、他の方のお助行にも出来るかぎりご奉公させていただこうと思いました。

また、入院中は御導師や奥さまはじめ、たくさんの方のお見舞を頂戴しましたが、手術の前や後に励ましていただいたことも大変心強く思い、有難く感じました。

今は二ヶ月に一度の通院ですが、お陰さまで手術以来、私は順調に快復しています。今回の大病に大きな御利益をいただいたことはもちろん、困ったときに励まし合えるご信者の仲間の大切さを学んだことは、私にとって何よりの御利益だったと思います。

ありがとうございます。

(平成十七年十一月二十日発表)

息子が自分の親となり

第十連合第二大歓組 吉岡千代子

ありがとうございます。

私は伊予市双海町という、海沿いの小高い所に住んでおります。普段はお寺が遠いので、あまりご奉公もできてはおりませんが、今日は体験発表をするようにとのことですので、私のささやかなご信心の喜びをお話しさせていただきます。

吉岡家は代々、ご近所の禅宗のお寺にお世話になっておりました。ところが長男の秀明が、高校の同級生だった城戸さんの紹介で本門佛立宗に入信をしたのです。きっかけは嫁の病気でした。それからというもの、息子は熱心に信仰に励むようになり、嫁が御利益をいただいて元気になったことや、息子の次女の顔に幼い頃からあった痣が、ご祈願をすると消えてしまったことなど、御題目の不思議な話を聞かせてくれるようになりました。そしてある日、「お母さんもご信心をしたらどうか」と私にも入信を勧めてくれたのです。

小さな部落のことですから、正直に言ってご近所のお付き合いもあり、私はたいへん困りました。なにより禅宗のお寺の奥さんにも、老人会の趣味の先生をしてもらったりして、ほんとうにお世話になっていたのです。しかし、「やがてはこの子の世話になるのだから」と思い直し、思い切って息子の勧める本門佛立宗に入信することにいたしました。平成五年のことでした。

それ以来、息子が私のご信心の親になり、御宝前のお給仕やお看経の仕方を、週末に戻ってきては教えてくれました。特に息子が喧しく教えてくれたのは「謗法」ということでした。お陰で少々、ご近所とギクシャクすることもありましたが、今も教えに背かないように心がけております。

例えばこんなことがありました。去年の台風で神社の鳥居が壊れ、銅板を葺き直すことになって、一軒あたり二万円の寄付を言ってきたのです。田舎のことですから、宗旨に関係なく協力を迫られるのですが、私は神社への寄付は謗法になると思い、ガンとしてお断りをしました。すると今度は「出来ない理由を書面にして出せ」と言ってきたのです。あまりに強硬な姿勢に驚きましたが、私も腹をくくりました。そして、宗旨が変わったこと、今の御本尊さま以外は何も拝んではならないと教えられていること、もしそれでも寄付を出さなくてはならないならば、ここを出ていく覚悟があることを書いて提出したのです。すると先方も理解してくれたのか、それからは何も言わなくなり、今は近所の禅寺の奥さんにも、以前のようによくしていただいています。

息子に教わるままにご信心をしているお陰でしょうか。このたび、こんな御利益をいただきました。と言うのも私は昔、胃の手術をしており、直腸にポリープがあると診断されてからは、下痢がひどくて困っていました。しかも昨年、体調を崩したときは、医師からも「原因がわからない」と言われており、気分が悪くなっては点滴をしてもらうことの繰り返しでした。

ひどくなると朝夕のお看経も勤まらず、食事もろくに出来ないほどになり、四回も入退院を繰り返しました。頼りにしている息子も、タイのバンコクに単身赴任し、入院先の病院から松風寺の方を向いて

手を合わせるのが精一杯の状態でした。このままでは大変なことになると思い、ご信心を改良して、「今まで以上にしっかり御題目さまをお唱えしなければ」とお看経に励んでいたある夕方のことです。なぜか左側の頭だけが変に疼くので、「なんでだろう」と考えておりましたら、丁度その日、家の裏の畑に殺虫剤を散布していたのを思い出しました。その畑はまさに、御宝前さまに向かって左側にあります。私は「これだ」と思いました。

つまり、家の中にまでその殺虫剤が入り込んで、私の体調を壊していたのです。そういえばゴミを捨てる時も、畑の中に入ると気分が悪くなっておりましたが、それまではあまり気にせずにおりました。ところが御題目さまをたくさんお唱えするようにしたお陰で、御宝前さまから体調不良の原因を教えていただくことができたのです。

早速私は、家の窓をサッシに代え、出かけるときはマスクをするようにしました。すると今年は一度も入院せずに、普通にご飯をおいしくいただけるようになりました。毎日ご飯がおいしくいただけることの有難さを身を以って感じ、御宝前さまはちゃんと私のことも見守ってくださることに、心から感謝をさせていただきました。

もう一点、お話したいことがあります。それは御会式のご参詣はたいへん有難いということです。普段はなかなか松風寺まで参れない私は、ご参詣しても知り合いがありませんので、ちょっと寂しい気もしておりましたが、それでもご参詣させていただくと観面、不思議なことがあるのです。

たとえば、私はやむをえず老人会でクロッカーをしています。運動音痴で、とくに球技は苦手です。それがご参詣の後には必ず、自分も他人も驚くほど上手くなります。上手くできると気持ちのいいものです。遠くの小さな輪っかをスーッと潜り抜けたり、相手の玉に上手く命中して弾き飛ばしたりとスカッとします。いつもは一生懸命してもまったくの下手糞ですが、まるで別人のようになるので不思議です。手前味噌な話で恥ずかしいですが、こんなことでも私は、御会式参詣の功德と喜ばせていただいております。

私が今、御宝前さまにお願いしているのは、息子が外国で元気に仕事をまっとうできることと、孫たちの健康です。お願いが叶いますよう、これからも一生懸命御題目口唱に励んでいきたいと思っております。

ありがとうございました。

(平成十七年十一月二十七日発表)

口唱の改良で得たご信心の尊さ

第一連合第二妙泉組 吉田純四郎

ありがとうございます。

私の会社は建築設計事務所です。平成三年に数十人で設立いたしました。得意先は国や県、市町村で、大学の施設・学校・病院・福祉施設・防衛施設・消防施設等、人の財産や人命を預かる施設の設計・監

理の仕事をしております（余談ですが今話題の、民間の悪徳設計者の存在は信じられません）。

当時はバブルが崩壊しはじめた頃で、周りからは「こんな時期に無謀だ」と言われましたが、お蔭さまでこの十七年間、何とか黒字経営を継続させていただいており、東京本社を始め、札幌・仙台・名古屋・大阪・神戸・広島・松山・福岡に支店を置き、今では中国(南省市)にも技術者を置くことが出来ました。

設立当時は松山支店にいましたが、「中国地方を開拓せよ」との社命を受け、単身で広島に出て参りましたのが平成十二年の八月ですから、早やいもので六年目を迎えております。

さて、広島に派遣され、支店設立から三年目までは順調に業績を伸ばしておりましたが、四年目で広島支店は赤字決算をすることになりました。「油断」でした。

そこで五年目を迎えるにあたり、再度一から出直す覚悟で私の給料を二割減額し、営業マンを解雇しました。このままではまた赤字となるのは目に見えておりましたので、営業と設計の二足の草鞋を履く覚悟で自分にリスクをかけたのです。

そしてご奉公の面でも、今までは単身赴任を理由に、休日松山に帰ったときにお寺参詣をし、連合御講や組御講も休日の際に参詣する程度でしたが、普段もお寺参詣をさせていただいて、何とか御法におすがりして助けていただきたいと、自身の改良を考えました。ちょうど夏期参詣が始まる時期でしたので、休日は松風寺に、広島にいるときは広隆寺さんに参詣させていただき、何とか皆参することも出来ました。

夏期参詣終了後も、出張以外は両方のお寺参詣を続け、ひたすら事業がうまく行きますよう、大きな声で御題目を口唱させていただいておりました。すると夏も終り、十月に入って、当社の新年度が始まった途端に、以前お世話になった国立病院から指名をいただき、精神病棟の設計を受注することが出来ました。そして引き続き、広島市から初めての指名が入り、小学校の設計を受注。それから次々と設計の仕事が入り、半年で一年間の売り上げを達成することが出来たのです。

お陰で今年の九月の決算は黒字決算で、社員に賞与を出すことができました。そして私もこの秋、家内と念願のハワイ旅行を実現し、三十年ぶりの新婚旅行が果たせました。「御法さまのお陰をいただいた」と、つくづくそう思う次第であります。

思い返せば東京で就職し、Uターンで松山に帰り、以前の設計事務所に勤めていた頃は、宇和島や高知の中村への転勤や業績悪化等々、給与の遅配は言うに及ばず、あげくの果てには自殺者を出したりと、悲惨な毎日の連続でした。「一杯のかけそば」ではありませんが、近くのうどん店で二杯のうどんを注文し、家族四人が分けて食べたこともありました。その頃の私は「何と自分はない。何でこんな苦勞を……」と自分の不運を人のせいにし、他人をうらやむ日々でした。

「あの頃、御法におすがりしていれば」と、今になって思います。少し遠回りをしましたが、信心改良の目覚めが遅かった感は否めません。

今年のご奉公目標は、「口唱の改良」でした。大変なお陰をいただきました。今後もさらに口唱の改良を図り、お教化のお供えを実現し、お寺の興隆と、家族の幸せを念じつつ、お寺参詣、御講参詣に励まさせていただきます。

ありがとうございました。

(平成十七年十二月四日発表)

勇気を持ってお教化を

第二連合第二堅信組 寺岡真寿美

ありがとうございます。

このたび、開講百五十年の記念のお教化を成就させていただいた喜びをお話させていただきます。

私は今、道後の「山の手ホテル」でパートをしておりますが、今年の夏の御会式に参詣させていただいたときに、偶然職場の仲間の北村高江さんに出会いました。これまでも、ご信者さんと知らずにお付き合いしていた人と、御会式などでバツタリ顔を合わせて驚くことがありましたので、私はこのときも北村さんがてっきりご信者さんだと思い、「あら、ありがとうございます。どこの組ですか？」と聞きました。ところが、私の顔を見た北村さんは困惑気味で、会話も歯切れがよくありません。そのうち、「私は何も入っていないのよ」と小さな声で私に告げました。

私はお寺で出会った人は、頭からご信者さんと思い込んでおりました。ですから最初はピンと来ませんでした。やがて「ああ、この人はご信者さんじゃないんだ」と気付きました。「じゃあ、どうしてお参りしているのだろう」と気になりましたが、北村さんとはそんなに親しいお付き合いがありませんでしたので、それ以上立ち入った話をする勇気が持てず、その日はそのまま別れました。

それから、「北村さんはどうしてお参りしていたのだろう」ということが、私はずっと気になっていました。しかし、職場でも同じ時間帯に勤務する機会は少なく、たまたま顔を合わせても、仕事中は私語を交わせませんから、込み入った話はできません。何より私には、北村さんにご信心の話を切り出す勇気がありませんでした。

そんな悶々とした気持ちでお参詣した十月の組御講でのことです。御法門で、「ご信者は御宝前さまが、足りないところは後押ししてくださるのだから、あとは自分が勇気を持つことが大事」と教わり、私は聴聞しながら北村さんのことを思いました。そして御法門のあとで、お教務さまにそのことを話すと、「大丈夫。ぜひ頑張って話してみましよう」と背中を押していただくことができました。

その数日後のことです。北村さんと休憩時間に一緒になった私は、「この間はどのようにして松風寺の御会式に来ていたの？」と思い切って声をかけることができました。北村さんはちょっと驚いたようでしたが、大阪に居た頃、お姑さんが本門佛立宗のご信者さんで、熱心にご信心をしていたこと。「私は補佐よ」と言いながら、自分にご信心に消極的だったこと。しかし、お姑さんのご信心をされる様子はずっと見ていたこと。そしてお寺の近くの喫茶店で、たまたま居合わせた石手に住まれる松風寺のご信者さんから、お寺の場所と御会式の日を聞いたことなど話してくれました。そして私と一緒に、一度お寺に参詣をする約束をしてくれたのです。

ところがその約束は、なかなか実現しませんでした。職場で顔を合わす機会は少なかったのですが、顔を見ると勇気を出して近付いて、私語が禁止されている中で根気よくお寺参詣を誘いました。短い会

話の中で、北村さんは四年前に姪のお産の手伝いに松山に来て、そのまま松山が気に入って暮らしていることや、身内のご回向をしたいと思っていることなども分かりました。

十一月一日の御修行に、ようやく待ち合わせができた私は、北村さんがお寺に来られないので、思い切ってそのまま家を訪ねることにしました。家を訪ねるようなお付き合いではなかったので、「しつこく思われるかな」とも考えましたが、玄関先で「先にお寺で待ってるからね。必ず来てね」と声だけかけて、再びお寺に戻りました。

しばらくして、北村さんはお寺に来られました。嬉しかったです。私は北村さんに、松風寺のご信者としてご信心をさせていただくよう勧めました。最初、北村さんは、「勝手に入信すると、お姑さんに叱られる」と言って渋っていましたが、どうしてもご回向はしたいようでした。ご回向の仕方を聞かれるので、「ご信者さんは皆あらかじめお塔婆を作ってもらって、こうしていつでも自分の引き出しから出して、ご回向をお願いするのよ」と答えました。すると北村さんは、しばらく考えて、「私もご信者になると、お塔婆を作ってもらえるの?」と言いました。私はほんとうに嬉しくなり、「ええ、作っていただけるわよ」と大きな声で答えました。

こうして、北村さんは松風寺のご信者さんとなりました。まだ、北村さんの勤務の状態がよく分からず、御講参詣などもうまくお誘いできていませんが、これから精一杯お世話をさせていただいて、早く御利益をいただけてもらえるよう頑張りたいと思っています。

今回、お教化をさせていただいたことで、私は勇気を持ってご信心をお勧めする大事さを学びました。今年度も開講百五十年の記念のお教化を成就できますよう、勇気を持ってご奉公に励ませていただきます。

ありがとうございました。

(平成十七年十二月十一日発表)

おかんきでねつがさがった

第三連合第二勸信組 中山あおい

ありがとうございます。

わたしは、小学校三年生の中山あおいです。わたしは、生まれたときから松風寺にお参詣してきました。おばあちゃんはふだんはやさしいのですが、ご信心のことはとてもきびしく教えてくれます。だから、千日参詣もおとなの人に負けないように、いつも朝早く起きてがんばっています。毎月のおどうし様の御講も、おこうし様の御講も、くんげ会もいつもお参りしています。

今日はわたしがご宝前様からいただいたご利やくの発表をさせていただきます。

わたしが、ようち園の大きい組の時のことです。くんげ会でスケートに行くことになっていて、早くから楽しみにしていました。ところがちょうどその日の朝、ねつをだしてしまい、あんなに楽しみにしていたスケートに行くことができなくなってしまいました。わたしはあきらめきれずに泣いてしまいま

した。そんなとき、おばあちゃんが、「そんなにスケートに行きたいのなら、まだ時間があるから、一時間おかんきささせていただきます」と言ったのです。そこでわたしもすなおになって、一時間おばあちゃんといっしょに、いっしょうけんめいお題目をおとなえました。

一時間が終わってねつをはかってみると、さがっていました。おばあちゃんの言うとおりにして、スケートに行くことができました。

わたしは、日ごろきびしいおばあちゃんだけれど、わたしのためにご宝前様におねがいすることのたいせつなことを教えてくれたのだと思いました。そして、わたしのその願いをご宝前様はちゃんとかなえてくださいました。本当にご宝前様のおかげだと思いました。

これからも、毎朝お寺にお参詣して、大きな声でお題目を上げさせていただき、ご宝前様に守っていただきたいと思います。

ありがとうございました。

(平成十七年十二月十八日発表)

お莊嚴の工夫

第四連合第二長寿組 武市まゆみ

ありがとうございます。

私の所属する連合の連合長さんは、当年八十八歳になる森山一男さんです。森山さんのお宅は、御講やお助行で時々お参詣させていただくと、前に来たときと御戒壇やその周辺の感じが少しずつ変わっていて、しかもいつも明るく清潔感があります。それは森山さんが、御宝前を少しでも良くしようとお給仕されるお心の表れで、「拝見させていただいてとても楽しくなるような、そんな雰囲気がいいなあ」と憧れを感じていました。御宝前さまのお花もとても綺麗に活けてあります。季節にあったお花が選ばれているのも、御戒壇周辺のお床の空間に、さりげなく飾られた一つひとつの物にも、私はいつも心が動かされ、「男性のご信者で、ここまで気を遣ってご莊嚴される方は素晴らしいなあ」と頭の下がる思いで家に帰っておりました。

そこである日、「私も森山さんのように、少しでも気になるところを変えていけたらいいなあ」と思い、自宅の御戒壇の気になる所を良くしようと思い立ちました。

私はまず、御戒壇の収納の部分からお掃除をさせていただくことにしました。普段はあまり開けて整理をすることもない場所なので、この際に中の物を全部取り出し、御戒壇用のお布巾で中をきれいに拭き清め、不要な物は思い切って処分しました。また、必要な物は整理をして、改めて丁寧に入れ直しました。さらに御戒壇がすっきりするように、脇台も整理して使いやすいようにしました。最初は見えないうところが中心でしたが、これだけでも十分綺麗になり、私自身も清しい気持ちになって、「お掃除をさせていただいて良かった」と思いました。

後日、私は他の気になる所のお給仕にも取りかかりました。一番気になっていたのは、御戒壇そのもの

の汚れでした。我が家の御戒壇は、祖母が約十五年前に建立させていただいたもので、祖母が毎日お給仕をさせていただいておりました。しかし、それでも長年我が家をお護りいただく中で、輝きが失われてきておりました。

私は表面の汚れを取ることに始めました。専用のお布巾をすこし湿らせて、軽く拭いてみました。それでも汚れのひどい所は、中性洗剤を薄めた液をしぼり、それで拭きとっていきました。すると乾拭きも含めて何度かお掃除させていただくうちに、今までよりも御戒壇が光ってきました。それまで使用していたお布巾も、祖母が以前、他寺院にお参詣させていただいた折に頂戴していた、毛羽だちのない素材のものに替えました。その後も、時間ができると内々陣をお掃除させていただいたり、ガラスを磨かせていただきました。やがて我が家の御戒壇は、見違えるように綺麗になっていきました。

しかし私には、まだ気になっていることがありました。それはお花入れと、木琴のクッションでした。そこで金属性のお花入れを、以前より自分なりに思い描いていた、「こういう花入れならいいのになあ」というガラスの花瓶に変えてみました。また、木琴のクッションがなく、タオルを代用していたので、手芸店に行ってぴったりの布地を見つけ、木琴のサイズにあわせて縫わせていただきました。

こうして、我が家の御戒壇に心を込めてお給仕させていただくようになった私は、御講やお助行でお教務さんやご信者さんが来られても、とても安心した気持ちでお迎えできるようになりました。御宝前さまを綺麗にさせていただいたことで、それまでの自分から生まれ変わったような気さえしました。それ以降、常に御宝前さまのお給仕を心がけてさせていただいています。

私が御戒壇を綺麗にさせていただいたことを、祖母も家族もみんな喜んでくれていました。また、「お花入れを変えたくらいでは他の人も気付かないかな」と思っておりましたら、お講師さまも組長さんも、「綺麗になったね」と言ってくださり、とても嬉しく思いました。

これからも森山さんのご自宅の御戒壇をはじめ、他のご信者さんのお宅の御戒壇のよい所をどんどん学ばせていただいて、いつも綺麗な御戒壇に大切な御本尊さまをご安置させていただけるよう、心掛けさせていただきます。

ありがとうございました。

(平成十七年十二月二十五日発表)